

『一百八法明門』考

石 井 修 道

一 はじめに

十二巻本『正法眼蔵』（出家功德・受戒・袈裟功德・発菩提心・供養諸仏・帰依仏法僧宝・深信因果・三時業・四馬・四禅比丘・一百八法明門・八大人覺）は、前世紀に発見されて以来、注目され、研究されて今日に及んでいる。本論文で取り上げる『一百八法明門』は、従来、十二巻本の中でも唯一内容が全く知られることのないものである。既にいささか十二巻本について考察してきたので、道元の仏伝観に注目しながら、今回はこの『一百八法明門』の位置づけを検討してみたい。

さて、第九『四馬』の構成が、荊溪湛然の『輔行伝弘決』巻二之五（大正四六 二二二a b）であることを、『四馬』考¹（駒沢大学仏教学部研究紀要 第五九号、二〇〇一年三月）で明らかにした。従来、つづく第十『四禅比丘』が、荊溪湛然の『輔行伝弘決』等を中心に構成され、四禅を四果と併計する比丘を戒め、更に趙宋天台の山家派の立場を継承して山外派の三教一致説を批判し、同時に雷庵正受の『嘉泰普燈録』の三教一致説批判に及んでいると指摘されている。この点についても、筆者自身も『四禅比丘』考²（駒沢大学仏教学部論集 第三三号、二〇〇一年一〇月）で確認作業を踏まえて、検討を加えてみた。

『一百八法明門』も、当然、先ずこれらの成果を踏まえて検討すべきであると考える。

二 試訳『一百八法明門』

第十一『一百八法明門』の構成を（A）（B）の二段の分け、（A）を更に三段に細分する。（下段の数は岩波文庫本（四）の頁数）

（A）『仏本行集經』の一百八法明門

（三七七）四〇二頁

（一） 一百八法明門の説法開始状況

三七七頁

（二） 一百八法明門とは何か

三八三頁

（三） 一百八法明門の受持

四〇二頁

（B） 一百八法明門を審細に参学すべきこと

四〇二頁

正法眼蔵第十一 一百八法明門

（A）（一） 爾時護明菩薩、觀生家已。時兜率陀有一天宮、名曰高幢、縱広正等六十由旬。菩薩時々上彼宮中、為兜率天説於法要。是時菩薩、上於彼宮、安坐訖已、告於兜率諸天子言、「汝等諸天、応来聚集、我身不久下於人間。我今欲説一法明門、名人諸法相方便門。留教化汝最後。汝等憶念我故、汝等若聞此法門者、応生歡喜」。

時兜率陀諸天大衆、聞於菩薩如此語已、及天玉女、一切眷屬、皆来聚集、上於彼宮。

護明菩薩、見彼天衆聚會畢已、欲為説法、即時更化作一天宮、在彼高幢本天宮上。高大広闊、覆四天下、可喜微妙、端正少双、威德巍巍、衆宝莊飾。一切欲界天宮殿中、無匹喻者。色界諸天、見彼化殿、於自宮殿、生如是心、如塚墓相。

時護明菩薩、已於過去、行於宝行、種諸善根、成就福聚、功德具足、所成莊嚴、師子高座昇上而坐。

護明菩薩、在彼師子高座之上、無量諸宝、莊嚴間錯無量無辺。種々天衣而敷彼座、種々妙香以薫彼座。無量無辺宝炉燒

香、出於種々微妙香花、散其地上。高座周匝有諸珍寶、百千萬億莊嚴放光、顯耀彼宮。彼宮上下寶網羅覆、於彼羅網多懸金鈴。彼諸金鈴出声微妙。彼大宝宮、復出無量種々光明。彼宝宮殿千萬幡蓋、種々妙色映覆於上。彼大宮殿、垂諸旒蘇、無量無辺百千萬億諸天玉女、各持種々七寶、音声作樂讚歎、説於菩薩往昔無量無辺功德。護世四王百千萬億、在於左右守護彼宮。千萬帝釈禮拜彼宮、千萬梵天恭敬彼宮。又諸菩薩百千萬億那由他衆、護持彼宮。十方諸仏、有於万億那由他數、護念彼宮。百千萬億那由他劫所修行、行諸波羅蜜、福報成就、因緣具足、日夜增長、無量功德、悉皆莊嚴。如是如是、難説難説。

彼大微妙師子高座、菩薩坐上、告於一切諸天衆言、「汝等諸天、今此一百八法明門、一生補処菩薩大士、在兜率宮、欲下託生於人間者、於天衆前、要須宣暢説此一百八法明門。留與諸天以作憶念、然後下生。汝等諸天、今可至心諦聽諦受、我今説之。」

爾の時に護明菩薩、生家を觀じ已りぬ。時に兜率陀に一天宮有り、名を高幢と曰う、縱広正等六十由旬なり。菩薩時々彼の宮の中に入り、兜率天の爲に法要を説けり。是の時に菩薩、彼の宮に入りて、安坐し訖已りて、兜率諸天子に告げて言く、「汝等諸天、応に來り聚集るべし、我が身久しからずして人間に下るべし。我れ今ま一の法明門を説かんと欲う、入諸法相方便門と名づく。教を留めて汝を化すること最後なり。汝等我れを憶念するが故に、汝等若し此の法門を聞かば、応に歡喜を生ずべし。」

時に兜率陀諸天の大衆、菩薩の此の如く語るを聞き已りて、天の玉女、一切の眷屬に及ぶまで、皆な來り集聚りて、彼の宮に入りぬ。

護明菩薩、彼の天衆の聚會り畢已れるを見て、爲に法を説かんと欲いて、即時ち更に一天宮を化作して、彼の高幢を本天宮の上に在けり。高大広闊にして四天下を覆い、喜ぶべき微妙、端正双び少く威徳巍巍たり、衆宝もて莊飭せり。一切欲界の天宮殿の中に、匹喻すべき者無し。色界の諸天、彼の化殿を見て、自が宮殿に於て是の如くの心を生ぜり、塚墓の相の如しと。

時に護明菩薩、已に過去に於て、宝行を行じ、諸の善根を種えて、福聚を成就し、功德具足して、成ぜる所の莊嚴の師子の高座に昇上りて坐せり。

護明菩薩、彼の師子の高座の上に在り、無量の諸宝、莊嚴間錯して無量無辺なり。種々の天衣もて彼の座に敷き、種々の妙香以て彼の座に薫す。無量無辺の宝炉に焼香し、種々微妙の香花を出して其の地上に散す。高座を周匝して諸の珍宝有り、百千万億の莊嚴放光、彼の宮を顕耀かす。彼の宮の上下は宝網羅もて覆い、彼の羅網には多く金鈴を懸く。彼の諸の金鈴、声を出すこと微妙なり。彼の大宝宮、復た無量種々の光明を出す。彼の宝宮殿の千万の幡蓋、種々の妙色ありて映りて上に覆つ。彼の大宮殿、諸の旛蘇を垂れ、無量無辺百千万億の諸の天の玉女、各おの種々の七宝を持し、音声もて作樂し讚歎して、菩薩往昔よりの無量無辺の功德を説く。護世の四王百千万億、左右に在りて彼の宮を守護す。千万の帝釈、彼の宮を禮拜し、千万の梵天、彼の宮を恭敬す。又た諸の菩薩百千万億那由他衆、彼の宮を護持す。十方の諸仏、万億那由他教有りて、彼の宮を護念したまふ。百千万億那由他劫に修せし所の行、諸波羅蜜を行ぜし、福報成就し、因縁具足し、日夜に増長し、無量の功德、悉皆な莊嚴せり。是の如く是の如く、難説難説なり。

彼の大微妙なる師子の高座に、菩薩、上に坐して一切諸天衆に告げて言く、「汝等諸天、今ま此の一百八法明門、一生補処の菩薩大士、兜率宮に在りて、下りて人間に託生せんと欲する者、天衆の前に於て、要らず須らく此の一百八法明門を宣暢して説くべし。諸天に留与して以て憶念を作さしめ、然後に下生す。汝等諸天、今ま至心に諦聽し諦受すべし、我れ今ま之を説くべし」。

「訳」 正法眼蔵第十一 一百八法明門

そこで、護明菩薩は、生まれるべき家を觀察した。その時、兜率陀天に、高幢と名づける一つの天宮があった。その大きさはタテ・ヨコちょうど六十由旬であった。菩薩は時々その宮の中に入り、兜率天の天人たちの為に法要を説いた。ある時、菩薩は、この宮に上り、ゆったりと坐つてから、兜率の諸天たちに告げて言つた、「諸天たちよ、ここにやつてきて集りなさい。我がこの身はまもなく人間に下るのである。わたしは今ま一つの「すべての法相に入る方便の門」と名づける、法明門（「まことを明かす入り口」）を説こうと思つ。君たちに教を説いて導くことはこれが最後となる。君たちがわたしを思い出すのに、もしこの法門を聞かぬならば、きつと歎息を生ずるのである」。

その時、兜率陀の諸天の大衆たちは、菩薩がこのように語るのを聞いてから、天の玉女から、一切の眷属に及ぶまで、皆なやつてきて集り、この宮殿に上った。

護明菩薩は、これらの天衆が集つたのを見て、法を説かんと思ひ、そこで更に一つの天の宮殿を神通力で作り出して、そこに高い幢を中心の天の宮殿の上に置いた。その宮殿は高大で巾広く、四天下を覆ひ、はなはだ心地よい絶妙の美しさで、端正さは比べるものがなく、威力は堂々として、多くの宝で莊嚴されていた。あらゆる欲界の天の宮殿の中には、それに匹敵すべきものは無かつた。色界の（初禪の梵衆天から二禪・三禪・四禪の色究竟天までの）諸天たちは、その現出した宮殿を見て、自分らの宮殿において、このように感じた、それと比べるとわれわれの宮殿はまるで塚臺はつかだいのようだと、そこで護明菩薩は、已に過去において、宝のような（立派な）修行をし、諸のよい結果をもたらす善根を植えて、幸福の力を完成し、善業を積み重ねて得られた力を身につけ、莊嚴された師子の高座に昇つて坐つた。

護明菩薩は、その師子の高座の上に坐ると、高座は無数の宝が入り雜つて、莊嚴されており、その数は数えきれなかつた。数々の天人の衣を、彼の座の下に敷き、数々のすばらしい香でその座は薫ぜられた。無数の宝で飾つた香炉に焼香し、数々の微妙な香りを発する花を取り出してその地上に散らした。高座の周囲には沢山の珍宝がちりばめられており、百千万億の莊嚴によつて放たれた光が、その宮殿を耀かした。その宮殿の上下は宝で飾られた網で覆ひ、その網には多くの金の鈴が懸けられていた。その多くの金の鈴が、微妙な音色で鳴り響いた。その大宝で飾られた宮殿は、復た無量の数々の光明を放ち出した。その宝の宮殿にある千万の幢と天蓋は、数々の絶妙な色で彩られてその上を覆つた。その大宮殿は、多くの吹き流しと房が垂れ、無量無辺百千万億の諸の天の玉女たちが、各おの数々の七宝を身につけ、歌声で楽しませ讃歎して、菩薩の昔からの無量無辺の善業を積み重ねて得られた力を説いたのである。世を護る四天王（持国天・增長天・広目天・多聞天）が百千万億、左右にいて、その宮殿を守護していた。千万の帝釈天は、その宮殿を禮拜し、千万の梵天は、その宮殿を敬つていた。又た百千万億那由他衆の諸の菩薩は、その宮殿を保護していた。一億那由他数の十方の諸仏は、その宮殿に思いを寄せられた。百千万億那由他劫にわたつて、修行し、諸波羅蜜を行じ、福報を完成し、因縁を具足し、昼も夜も増長した、無量の善業を積み重ねて得られた力は、総て皆な莊嚴された。もはやこれ以上に言葉でこれこれとさらに説き及ぶことは困難である。

その絶大にして微妙なる師子の高座に、菩薩は座り、一切の諸の天衆たちに告げられた、「汝等諸天たちよ、いまこの一百八法明門は、仏位を次に約束され、人間界で一生のみ過ごす菩薩大土が、兜率宮に在つて、そこより下つて人間に誕生しようとするとき、天衆たちの前において、この一百八法明門を説くものである。諸天たちに留め置いてそれを記憶させて、後に人間世界に下生するのである。諸天たちは、いま心をこめてはつきりと聴いて受け取らねばならない、わたしはいまこれを説くであらう」。

(A) () 一百八法明門者何。 一百八法明門とは何ぞや。

「訳」 それでは一百八法明門、つまり百八のまことを明かす入り口とは何か。

(一) 正信是法明門、不破堅牢心故。 正信(しん)是れ法明門なり、堅牢の心を破せざるが故に。

「訳」 正信(正しい信仰心)は法明門である、それは破壊されないしつかりと固められた心だから。

(二) 淨心是法明門、無濁穢故。 淨心是れ法明門なり、濁穢(じよくえ)なきが故に。

「訳」 淨心(淨い心)は法明門である、それは煩惱によって濁り汚れが無いから。

(三) 歡喜是法明門、安穩心故。 歡喜是れ法明門なり、安穩(あんおん)心の故に。

「訳」 歡喜(かんき)(身も心もよること)は法明門である、それはゆったりとやすらいだ心だから。

(四) 愛染是法明門、令心清淨故。 愛染是れ法明門なり、心をして清淨ならしむるが故に。

「訳」 愛染(あいせん) (世間・出世間の善い法を信じ染(お)うこと) は法明門である、それは心を清淨にするから。

(五) 身行正行是法明門、三業淨故。 身行正行是れ法明門なり、三業淨きが故に

「訳」 身行正行 (身体的行為が正しく行われこと) は法明門である、それは身体の殺生・偷盜・邪淫(の三) 惡(の) 行為が淨いから。

(六) 口行淨行是法明門、断四惡故。 口行淨行是れ法明門なり、四惡を断するが故に。

「訳」 口行淨行 (言語行為が淨く行われること) は法明門である、それは妄語・綺語・惡口・兩舌の四惡を断つから。

(七) 意行淨行是法明門、断三毒故。 意行淨行是れ法明門なり、三毒を断するが故に。

「訳」 意行淨行 (心のはたらきが淨く行われること) は法明門である、それは貪・瞋・痴の三毒を断つから。

(八) 念仏是法明門、觀仏清淨故。 念仏是れ法明門なり、觀仏清淨なるが故に。

「訳」 念仏 (仏を憶念すること) は法明門である、それは仏を觀想することが清淨であるから。

（九）念法是法明門、觀法清淨故。念法是れ法明門なり、觀法清淨なるが故に。

「訳」念法（法を憶念すること）は法明門である、それは法を觀察することが清淨であるから。

（一〇）念僧是法明門、得道堅牢故。念僧是れ法明門なり、得道堅牢なるが故に。

「訳」念僧（僧を憶念すること）は法明門である、道を得ることがしつかり固まっているから。

（一一）念施是法明門、不望果報故。念施是れ法明門なり、果報を望まざるが故に。

「訳」念施（布施を憶念すること）は法明門である、それはその結果の見返りを望まないから。

（一二）念戒是法明門、一切願具足故。念戒是れ法明門なり、一切の願具足するが故に。

「訳」念戒（持戒を憶念すること）は法明門である、それはあらゆる願いを身につけるから。

（一三）念天是法明門、發広大心故。念天是れ法明門なり、広大心を発すが故に。

「訳」念天（涅槃の果としての天を憶念すること）は法明門である、それは広大な心を発すから。

（一四）慈是法明門、一切生処善根擧勝故。慈是れ法明門なり、一切の生処に善根擧勝なるが故に。

「訳」 慈は法明門である、それはあらゆる生きものに善根をもたせ、勝れたものにさせるから。

(一五) 悲は法明門、不殺害衆生故。 悲是れ法明門なり、衆生を殺害せざるが故に。

「訳」 悲は法明門である、それは衆生を殺害しないから。

(一六) 喜は法明門、捨一切不喜事故。 喜是れ法明門なり、一切不喜の事を捨するが故に。

「訳」 喜は法明門である、それはあらゆる喜はしくない事を捨てさせるから。

(一七) 捨は法明門、厭離五欲故。 捨是れ法明門なり、五欲を厭離するが故に。

「訳」 捨は法明門である、それは色・声・香・味・触の五欲を嫌って離れさせるから。

(一八) 無常観は法明門、観三界慾故。 無常観是れ法明門なり、三界の慾を観するが故に。

「訳」 無常観は法明門である、それは欲界・色界・無色界の三界の欲心を観察するから。

(一九) 苦観は法明門、断一切願故。 苦観是れ法明門なり、一切の願を断するが故に。

「訳」 苦観は法明門である、それはあらゆる願望を断つから。

(二〇) 無我観は法明門、不染著我故。無我観是れ法明門なり、我に染著せざるが故に。

〔訳〕 無我観は法明門である、それは我に染まり執着しないから。

(二一) 寂定観は法明門、不擾乱心意故。寂定観是れ法明門なり、心意を擾乱せざるが故に。

〔訳〕 寂定観（涅槃観ともいわれる）は法明門である、それは心意識のはたらきをかき乱されないから。

(二二) 慚愧は法明門、内心寂定故。慚愧是れ法明門なり、内心寂定なるが故に。

〔訳〕 慚愧（心に自らの罪を恥じ、自らの罪を人に告白して恥じて罪の許しを請うこと）は法明門である、それは内心の恥がひっそりと静まるから。

(二三) 羞恥は法明門、外惡滅故。羞恥是れ法明門なり、外惡滅するが故に。

〔訳〕 羞恥（外に現れた悪を恥じること）は法明門である、それは外に現れた悪を滅するから。

(二四) 實是法明門、不誑天人故。實是れ法明門なり、天人を誑かさざるが故に。

〔訳〕 實（真理）は法明門である、それは天人を誑かさないから。

(二五) 真是法明門、不誑自身故。真是れ法明門なり、自身を誑かさざるが故に。

「訳」 真（真実）は法明門である、それは自身を誑かさなから。

（二六） 法行は法明門、随順法行故。法行（ト）は法明門なり、法行に随順するが故に。

「訳」 法行（善法を行うこと）は法明門である、それは善行に随うから。

（二七） 三帰は法明門、淨三惡道故。三帰（ト）は法明門なり、三惡道を淨からしむるが故に。

「訳」 三帰は法明門である、それは地獄・餓鬼・畜生の三惡道を淨くさせるから。

（二八） 知恩は法明門、不捨善根故。知恩は法明門なり、善根を捨せざるが故に。

「訳」 知恩（恩を知ること）は法明門である、それは善根を捨てないから。

（二九） 報恩は法明門、不欺負他故。報恩は法明門なり、他を欺負（ト）せざるが故に。

「訳」 報恩（恩に報いること）は法明門である、それは他人を欺（ト）き負（ト）かないから。

（三〇） 不自欺は法明門、不自訾故。不自欺は法明門なり、自ら訾（ト）めざるが故に。

「訳」 不自欺（ト）（自ら欺かないこと）は法明門である、それは自ら訾（ト）めないから。

〔三二〕 為衆生是法明門、不毀皆他故。 為衆生是れ法明門なり、他を毀^き皆^しせざるが故に。

〔訳〕 為衆生（衆生の為にすること）は法明門である、それは他人を誹謗^{いひせう}しないから。

〔三三〕 為法是法明門、如法而行故。 為法是れ法明門なり、如法にして行ずるが故に。

〔訳〕 為法（法おしえの為にすること）は法明門である、それは仏の法にのっとりて行つから。

〔三三〕 知時は法明門、不輕言說故。 知時はれ法明門なり、言説を輕んぜざるが故に。

〔訳〕 知時（時を知ること）は法明門である、それは言葉を輕んじないから。

〔三四〕 摂我慢是法明門、智惠満足故。 摂我慢是れ法明門なり、智惠満足するが故に。

〔訳〕 摂我慢（自らの慢心をしづかめさめること）は法明門である、それは智惠が十分に備わるから。

〔三五〕 不生惡心是法明門、自護護他故。 不生惡心是れ法明門なり、自ら護^ごし他を護するが故に。

〔訳〕 不生惡心（悪い心を起こさないこと）は法明門である、それは自ら護り他を護るから。

〔三六〕 無障礙是法明門、心無疑惑故。 無障礙是れ法明門なり、心、疑惑無きが故に。

「訳」 無障礙（仏道のさわりが無いこと）は法明門である、それは心に疑いや惑いが無いから。

（三七） 信解は法明門、決了第一義故。 信解は法明門なり、第一義を決了するが故に。

「訳」 信解（教えを信じ了解すること）は法明門である、それは第一義を決着つけるから。

（三八） 不淨觀は法明門、捨欲染心故。 不淨觀は法明門なり、欲染の心を捨するが故に。

「訳」 不淨觀（身は不淨と觀察すること）は法明門である、それは欲に染つた心を捨てるから。

（三九） 不諍鬪は法明門、断瞋訟故。 不諍鬪は法明門なり、瞋訟を断するが故に。

「訳」 不諍鬪（相手と争い鬪つことのないこと）は法明門である、それは瞋の心で訴え争つことを断つから。

（四〇） 不痴は法明門、断殺生故。 不痴は法明門なり、殺生を断するが故に。

「訳」 不痴（おろかさのないこと）は法明門である、それは生き物を殺すことを断つから。

（四一） 樂法義は法明門、求法義故。 樂法義は法明門なり、法義を求むるが故に。

「訳」 樂法義（まことの意味をねがうこと）は法明門である、それは正しい真理の意味を求めらるから。

（四二） 愛法明是法明門、得法明故。 愛法明是れ法明門なり、法明を得るが故に。

「訳」 愛法明（まことを明かすことを愛すること）は法明門である、それは正しい真理を明かすことができるから。

（四三） 求多聞是法明門、正觀法相故。 求多聞是れ法明門なり、法相を正觀するが故に。

「訳」 求多聞（多くの教えを聞くことを求めること）は法明門である、それは正しい真理のありのままの相を正しく觀察するから。

（四四） 正方便是法明門、具正行故。 正方便是れ法明門なり、正行を具するが故に。

「訳」 正方便（正しい眞実をさとする予備の修行）は法明門である、それは正しい行いを身につけるから。

（四五） 知名色是法明門、除諸障礙故。 知名色是れ法明門なり、諸の障礙を除くが故に。

「訳」 知名色（色受想行識の固体存在の五蘊を知ること）は法明門である、それは諸の障礙を除くから。

（四六） 除因見是法明門、得解脫故。 除因見是れ法明門なり、解脫を得るが故に。

「訳」 除因見（原因に固執する見方をやめること）は法明門である、それは解脫を得るから。

(四七) 無怨親心是法明門、於怨親中生平等故。 無怨親心是れ法明門なり、怨親の中に平等を生ずるが故に。

「訳」 無怨親心（憎しみと親しみの心をなくすこと）は法明門である、それは憎しみと親しみの中に隔てない平等を生ずるから。

(四八) 陰方便是法明門、知諸苦故。 陰方便是れ法明門なり、諸の苦を知るが故に。

「訳」 陰方便（固体存在の五蘊を知る予備の修行をすること）は法明門である、それは諸の苦を知るから。

(四九) 諸大平等是法明門、断於一切和合法故。 諸大平等是れ法明門なり、一切和合の法を断するが故に。

「訳」 諸大平等（ものの構成要素の地水火風等を平等とすること）は法明門である、それはあらゆる和合の法を断つから。

(五〇) 諸入是法明門、修正道故。 諸入是れ法明門なり、正道を修するが故に。

「訳」 諸入（眼耳鼻舌身意の六根と色声香味触法の六境の十二入を知ること）は法明門である、それは正道を修行するか
ら。

(五一) 無生忍是法明門、証滅諦故。 無生忍是れ法明門なり、滅諦を証するが故に。

「訳」 無生忍（不生不滅の真理の確信）は法明門である、それは苦の原因によって引き起こされた苦そのものを八正道を

修行することによつて到達する滅諦を証るから。

（五二） 受念処は法明門、断一切諸受故。受念処は法明門なり、一切の諸受を断ずるが故に。

「訳」 受念処（感受作用を苦と觀察すること）は法明門である、それはあらゆる感受作用を断つから。

（五三） 心念処は法明門、観心如幻化故。心念処は法明門なり、心を観すること幻化の如きが故に。

「訳」 心念処（心は無常と觀察すること）は法明門である、それは心を觀察すると魔法使いが作り出したように実体はないものであるから。

（五四） 法念処は法明門、智恵無翳故。法念処は法明門なり、智恵無翳なるが故に。

「訳」 法念処（あらゆる存在は無我であると觀察すること）は法明門である、それは智慧に翳が無いから。

（五五） 四正勤は法明門、断一切悪成諸善故。四正勤は法明門なり、一切の悪を断じて諸の善を成ずるが故に。

「訳」 四正勤（未生悪令不生 まだ行っていない悪を行わせない ・ 已生悪令滅 既に行った悪は滅してしまふ ・ 未生善令生 まだ行っていない善を行わせる ・ 已生善令増長 既に行った善は増長させる）は法明門である、それはあらゆる悪を断ち切つてあらゆる善を成すから。

（五六） 四如意足は法明門、身心輕故。四如意足は法明門なり、身心輕きが故に。

「訳」 四如意足（欲神足 勝れた禅定を得よつと願うこと ・ 心神足 心を修めて勝れた禅定を得ること ・ 進神足 勝れた禅定を得よつと精進すること ・ 思惟神足 智慧をもって思惟して勝れた禅定を得ること）は法明門である、それは身も心も軽くなるから。

（五七） 信根是法明門、不隨他語故。 信根^{（五）}是れ法明門なり、他の語に随わざるが故に。

「訳」 信根（仏道の信心のもと）は法明門である、それは他人の言葉に随わないから。

（五八） 精進根是法明門、善得諸智故。 精進根是れ法明門なり、善く諸の智を得るが故に。

「訳」 精進根（仏道の精進のもと）は法明門である、それは善くあらゆる智慧を得るから。

（五九） 念根是法明門、善作諸業故。 念根是れ法明門なり、善く諸の業を作すが故に。

「訳」 念根（仏道のみを觀察するもと）は法明門である、それは善く一切の身口意の業を作すから。

（六〇） 定根是法明門、心清淨故。 定根是れ法明門なり、心清淨なるが故に。

「訳」 定根（禅定で仏道にびつたりとなるもと）は法明門である、それは心が清淨となるから。

（六一） 慧根是法明門、現見諸法故。 慧根是れ法明門なり、諸法を現見するが故に。

「訳」 慧根（仏道の智慧のもと）は法明門である、それはあらゆる存在をありのままに見るから。

（六二） 信力は法明門、過諸魔力故。信力⁶²是れ法明門なり、諸の魔の力に過ぐるが故に。

「訳」 信力（仏道の信心のおかげ）は法明門である、それはあらゆる魔力を避けるから。

（六三） 精進力は法明門、不退転故。精進力はれ法明門なり、不退転なるが故に。

「訳」 精進力（仏道の精進のおかげ）は法明門である、それは不退転であるから。

（六四） 念力は法明門、不其他故。念力はれ法明門なり、他と共ならざるが故に。

「訳」 念力（仏道のみを観察するおかげ）は法明門である、それは他人と共通ではないから。

（六五） 定力は法明門、断一切念故。定力はれ法明門なり、一切の念を断するが故に。

「訳」 定力（禅定で仏道にびつたりとなるおかげ）は法明門である、それはあらゆる思念を断つから。

（六六） 慧力は法明門、離二边故。慧力はれ法明門なり、二边を離るるが故に。

「訳」 慧力（仏道の智慧のおかげ）は法明門である、それは迷いの相对分別の二边を離れるから。

(六七) 念覚分は法明門、如諸法智故。念覚分⁽⁶⁾は法明門なり、諸法智の如くなるが故に。

「訳」 念覚分(定慧均等に仏道を修すること)は法明門である、それはあらゆる存在が智慧のようであるから。

(六八) 法覚分は法明門、照明一切諸法故。法覚分は法明門なり、一切諸法を照明するが故に。

「訳」 法覚分(智慧をもってあらゆる存在の真偽を決断すること)は法明門である、それはすべてのあらゆる存在を明らかにするから。

(六九) 精進覚分は法明門、善知覚故。精進覚分は法明門なり、善く知覚するが故に。

「訳」 精進覚分(仏道を正しく精進すること)は法明門である、それは善く明確に知るから。

(七〇) 喜覚分は法明門、得諸定故。喜覚分は法明門なり、諸の定を得るが故に。

「訳」 喜覚分(仏道の真実に喜びを得ること)は法明門である、それはあらゆる禪定を得るから。

(七一) 除覚分は法明門、所作已弁故。除覚分は法明門なり、所作已に弁するが故に。

「訳」 除覚分(邪見と迷いを除く仏道を修すること)は法明門である、それは行為を既に見極めるから。

(七二) 定覚分是法明門、知一切法平等故。定覚分是れ法明門なり、一切法平等を知るが故に。

「訳」 定覚分（正しい禪定を修めること）は法明門である、それはすべての存在の平等を知るから。

(七三) 捨覚分是法明門、厭離一切生故。捨覚分是れ法明門なり、一切の生を厭離するが故に。

「訳」 捨覚分（意識の対象の執着を捨てること）は法明門である、それはあらゆる苦を生むものを厭い離れるから。

(七四) 正見是法明門、得漏尽聖道故。正見⁷⁴是れ法明門なり、漏尽聖道を得るが故に。

「訳」 正見（正しい見解）は法明門である、それは迷いを尽くして聖なる道を得るから。

(七五) 正分別是法明門、断一切分別無分別故。正分別是れ法明門なり、一切の分別と無分別とを断するが故に。

「訳」 正分別（正しい思い）は法明門である、それはあらゆる分別も無分別も断つから。

(七六) 正語是法明門、一切名字、音声語言、知如響故。正語是れ法明門なり、一切の名字、音声・語言は、響きの如く知るが故に。

「訳」 正語（正しい言葉）は法明門である、それはあらゆる名前・音や声・ことばは、響のように実体がないと知るから⁷⁵。

(七七) 正業は法明門、無業無報故。正業はれ法明門なり、業無く報無きが故に。

「訳」 正業（正しい身口意の行為）は法明門である、それは悪い身口意の行為が無く、その結果の報が無いから。

(七八) 正命は法明門、除滅一切悪道故。正命はれ法明門なり、一切の悪道を除滅するが故に。

「訳」 正命（正しい生活）は法明門である、それはあらゆる悪の道を除き滅するから。

(七九) 正行は法明門、至彼岸故。正行はれ法明門なり、彼岸に至るが故に。

「訳」 正行（正しい修行への努力）は法明門である、それはさとり^①の岸に至るから。

(八〇) 正念は法明門、不思議一切法故。正念はれ法明門なり、一切法を思念せざるが故に。

「訳」 正念（正しい仏道の観察）は法明門である、それはあらゆる存在を思念しないから。

(八一) 正定は法明門、得無散乱三昧故。正定はれ法明門なり、無散乱三昧を得るが故に。

「訳」 正定（正しい禅定）は法明門である、それは散乱しない三昧（精神統一）を得るから。

(八二) 菩提心は法明門、不断三宝故。菩提心^②はれ法明門なり、三宝を断ぜざるが故に。

「訳」 菩提心（さとりを求める心）は法明門である、それは仏法僧の三宝を断つことはないから。

（八三） 依倚は法明門、不楽小乗故。依倚(8)是れ法明門なり、小乗を楽(9)わざるが故に。

「訳」 依倚（仏道によること）は法明門である、それは自己の解脱のみを求めることを願わないから。

（八四） 正信は法明門、得最勝仏法故。正信是れ法明門なり、最勝の仏法を得るが故に。

「訳」 正信（仏道への正しい信心）は法明門である、それは最も勝れた仏(10)の法を得るから。

（八五） 増進は法明門、成就一切諸善根法故。増進是れ法明門なり、一切諸の善根の法を成就するが故に。

「訳」 増進（仏道を増進すること）は法明門である、それはあらゆるすべての善行のもととなる法(11)を完成するから。

（八六） 檀度は法明門、念々成就相好、莊嚴仏土、教化慳貪諸衆生故。檀度(12)是れ法明門なり、念々に相好を成就し、仏土を莊嚴し、慳貪の諸の衆生を教化するが故に。

「訳」 檀度（布施によるさとりの完成）は法明門である、それは一念一念に仏の相(13)好を完成し、仏の国土を飾りたて、物惜しみするあらゆる衆生を教え導くから。

（八七） 戒度は法明門、遠離惡道諸難、教化破戒諸衆生故。戒度はれ法明門なり、惡道の諸難を遠離し、破戒の諸の衆生を教化するが故に。

「訳」 戒度（戒律によるさとの完成）は法明門である、それは悪い道のあらゆる困難を遠ざけ、破戒のあらゆる衆生を教え導くから。

（八八） 忍度は法明門、捨一切嗔恚・我慢・諂曲・調戲、教化如是諸惡衆生故。 忍度はれ法明門なり、一切の嗔恚・我慢・諂曲・調戲を捨し、是の如きの諸の惡衆生を教化するが故に。

「訳」 忍度（苦難に堪え忍ぶことによるさとの完成）は法明門である、それはすべての瞋恚・我慢・諂曲・調戲をすっかり無くし、このようなあらゆる悪い衆生を教え導くから。

（八九） 精進度は法明門、悉得一切諸善法、教化懈怠諸衆生故。 精進度はれ法明門なり、悉く一切の諸の善法を得て、懈怠の諸の衆生を教化するが故に。

「訳」 精進度（精進によるさとの完成）は法明門である、それはすべてのあらゆる善き法おしえを得て、懈怠なまけるあらゆる衆生を教え導くから。

（九〇） 禅度は法明門、成就一切禅定及諸神通、教化散乱諸衆生故。 禅度はれ法明門なり、一切の禅定及び諸の神通を成就し、散乱の諸の衆生を教化するが故に。

「訳」 禅度（禅定によるさとの完成）は法明門である、それはすべての禅定やあらゆる神通を完成し、心が散乱していいあらゆる衆生を教え導くから。

（九一） 智度は法明門、断無明黑暗及著諸見、教化愚痴諸衆生故。智度はれ法明門なり、無明の黑暗及び諸見に著すること断じ、愚痴の諸の衆生を教化するが故に。

「訳」 智度（智慧によるさとり）の完成は法明門である、それは無知による闇やあらゆる邪見の執着を断ち切り、愚痴（おろか）なあらゆる衆生を教え導くから。

（九二） 方便是法明門、隨衆生所見威儀、而示現教化、成就一切諸仏法故。方便是れ法明門なり、衆生所見の威儀に隨いて、教化を示現し、一切諸仏の法を成就するが故に。

「訳」 方便（衆生を導くため）は法明門である、それは衆生に見られる立ち居振る舞いによつて、教え導きを示し、あらゆる諸仏の法（おしえ）を完成するから。

（九三） 四摂法是法明門、攝受一切衆生、得菩提已、施一切衆生法故。四摂法（しよく）はれ法明門なり、一切衆生を攝受し、菩提を得已りて、一切衆生に法を施すが故に。

「訳」 四摂法（布施・愛語・利行・同事）は法明門である、それはあらゆる衆生を受け入れて、菩提を獲得して後に、あらゆる衆生に法を施すから。

（九四） 教化衆生是法明門、自不受染、不疲倦故。教化衆生是れ法明門なり、自ら染を受けず、疲倦せざるが故に。

「訳」 教化衆生（衆生を教え導くこと）は法明門である、それは自分は楽しみを感受しないで、疲れも無く嫌がりもしないから。

(九五) 攝受正法是法明門、斷一切衆生諸煩惱故。攝受正法是れ法明門なり、一切衆生の諸の煩惱を断するが故に。

「訳」 攝受正法（正しい法を受け入れること）は法明門である、それはあらゆる衆生のすべての煩惱を断絶するから。

(九六) 福聚是法明門、利益一切諸衆生故。福聚是れ法明門なり、一切諸の衆生を利益するが故に。

「訳」 福聚（幸福への力を蓄えること）は法明門である、それはあらゆるすべての衆生に利益をもたらすから。

(九七) 修禪定是法明門、満足十力故。修禪定是れ法明門なり、十力⁽²⁾を満足するが故に。

「訳」 修禪定（禪定を修行すること）は法明門である、それは十種の力（処非処智力 道理にかなうことと道理にかなわないこととを弁別する力 業異熟智力 業とその果報との関係を知る力 静慮解脱等持等至智力 四禪・八解脱・三三昧・八等至などを知る力 根上下智力 衆生の機根の上下優劣を知る力 種種勝解智力 衆生の種種の望みを知る力 種種界智力 種種の衆生や諸法の本性を知る力 遍趣行智力 衆生の有漏・無漏の行の結果を知る力 宿住隨念智力 過去世のことを思い起こす力 死生智力 衆生が未来にどこに生まれるか死ぬかを知る力 漏尽智力 煩惱を断つた境界とそれを達成する手段を知る力 を満たすから。

(九八) 寂定是法明門、成就如来三昧具足故。寂定是れ法明門なり、如来の三昧を成就して具足するが故に。

「訳」 寂定（心の集中）は法明門である、それは如来の三昧を完成して体得するから。

（九九） 慧見は法明門、智慧成就満足故。 慧見はれ法明門なり、智慧成就して満足するが故に。

「訳」 慧見（智慧で觀察すること）は法明門である、それは智慧を完成して満たすから。

（一〇〇） 入無礙弁は法明門、得法眼成就故。 入無礙弁はれ法明門なり、法眼を得て成就するが故に。

「訳」 入無礙弁（＝無礙解。滞ることのない弁舌説法に入ること）は法明門である、それは真理の眼を獲得し完成するから。

（一〇一） 入一切行は法明門、得仏眼成就故。 入一切行はれ法明門なり、仏眼を得て成就するが故に。

「訳」 入一切行（あらゆる行に入ること）は法明門である、それは仏の眼を獲得し完成するから。

（一〇二） 成就陀羅尼は法明門、聞一切諸仏法能受持故。 成就陀羅尼はれ法明門なり、一切諸仏の法を聞いて能く受持するが故に。

「訳」 成就陀羅尼（善法を失うことなく悪法を生じさせることのない状態を保つこと）を完成すること（は法明門である、それはあらゆるすべての仏の法を聞いて、身につけ保つことができるから）。

（一〇三） 得無礙弁は法明門、令一切衆生皆歡喜故。 得無礙弁はれ法明門なり、一切衆生をして皆な歡喜せしむるが故に。

「訳」 得無礙弁（巧みな弁舌を獲得すること）は法明門である、それはあらゆる衆生をすべて喜ばせるから。

（一〇四） 順忍是法明門、順一切諸仏法故。 順忍是れ法明門なり、一切諸仏の法に順うが故に。

「訳」 順忍（仏の法に順うこと）は法明門である、それはあらゆるすべての仏の法に順うから。

（一〇五） 得無生法忍是法明門、得受記故。 得無生法忍是れ法明門なり、受記を得るが故に。

「訳」 得無生法忍（不生不滅の真理の確信を獲得すること）は法明門である、それは未来に仏となることの予言を獲得するから。

（一〇六） 不退転地是法明門、具足往昔諸仏法故。 不退転地是れ法明門なり、往昔の諸仏の法を具足するが故に。

「訳」 不退転地（成仏の進路を後退しないこと）は法明門である、それは昔のすべての仏の法を体得するから。

（一〇七） 從一地至一地智是法明門、灌頂成就一切智故。 從一地至一地智是れ法明門なり、灌頂して一切智を成就するが故に。

「訳」 從一地至一地智（十地の最初の一地からその一地の智慧に到達すること）は法明門である、それは頭の頂に水を灌いで仏位を継いであらゆる智慧を完成するから。

（一〇八） 灌頂地是法明門、從生出家、乃至得成阿耨多羅三藐三菩提故。 灌頂地是れ法明門なり、生れて出家するより、

乃至阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得るが故に。

「訳」 灌頂地(頭の頂に水を灌いで仏位を継ぐ地に到達すること)は法明門である、それは(兜率天より下生して)この閻浮提に生れて出家してより、阿耨多羅三藐三菩提(無上正等覺)を完成することができるから。

(A)() 爾時護明菩薩、說是語已、告彼一切諸天衆言、「諸天當知、此是一百八法明門、留与諸天、汝等受持、心常憶念、勿令忘失」。

爾の時に護明菩薩、是の語を説き已りて、彼の一切の諸の天衆に告げて言く、「諸天、當に知るべし、此れは是れ一百八法明門なり、諸天に留与す。汝等受持し、心に常に憶念して、忘失せしむることなかるべし」。

「訳」 その時、護明菩薩は、この語を説いてから、そこにいるあらゆるすべての天人たちに告げて言った、「すべての天人たちよ、これらが一百八法明門であることを知らねばならない。この教えをすべての天人に留めておきます。みなさんはこの教えを身に着け、いつも心に憶い起こして、忘れてしまつことのないようにしなければならぬ」。

(B) これすなはち一百八法明門なり。一切の一生所繫の菩薩、都史多天(としたても)より閻浮提(えんぶだい)に下生(げしやう)せんとするとき、かならずこの一百八法明門を、都史多天の衆のために敷揚して、諸天を化するは、諸仏の常法なり。

護明菩薩とは、釈迦牟尼仏、一生補処として第四天にましますときの名なり。李附馬、天聖広燈録(24)を撰するに、この一百八法門の名字をのせたり。参学のもがら、あきらめしれるはすくなく、しらざるは稻麻竹葦のごとし。いま初心晩学のともがらのためにこれを撰す。師子の座にのほり、人天の師となれらんともがら、書細参学すべし。この都史多天に一生所繫として住せざれば、さらに諸仏にあらざるなり。行者みだりに我慢することなかれ、一生所繫の菩薩は中有なし。

「訳」これが『仏本行集経』に説かれる一百八法明門である。あらゆる一生の間だけ迷いの世界に繋がれた菩薩が、兜率天より我等の住所である南閻浮提に下りて生れようとするとき、かならずこの一百八法明門を、兜率天の大衆のために説き明かして、すべての天人を教え導くのは、すべての仏のいつもの方法である。

護明菩薩とは、釈迦牟尼仏が、一生の間だけ迷いの世界に繋がれて、六欲天の第四天である兜率天におられる時の名前である。附馬都尉（皇帝の娘婿）の李遵勗が、『天聖広燈録』を撰述する時に、この一百八法門の仏教用語を記載している。禅を学ぶ者で、明らかにし、分るのは稀であり、知らない者は稲麻竹葦のごとく無数である。ここに初心の者にも晩学の者にも、その人々のために、この巻を撰述するのである。師子吼する説法の座にのほり、人天の師となるうとする人々は、このことを審細に参学しなければならぬ。護明菩薩のようにこの兜率天に仏位を次に約束されて一生の間だけ迷いの世界に繋がれて留まらなければ、もはや諸仏ではないのである。参禅修行者はむやみに我こそと高慢になつてはならない。仏位を次に約束されて一生の間だけ迷いの世界に繋がれた菩薩には中有は存在しないのである。

正法眼蔵一百八法明門第十一

三 『一百八法明門』の問題点

さて、以上のように、第十一『一百八法明門』の構成（岩波文庫本三七七～四〇二頁）は極めて簡単で、その内容は冒頭（A）に当たる本文の九割以上は『仏本行集経』の引用である。

ここにいう『仏本行集経』は、常盤大定氏の『国訳一切経』の「解題」に示すように、法蔵部の伝える仏伝といい、法蔵部と言えば、『四分律』六十巻を伝持している部派である。四分律と道元の関係は近年注目されており、今後検討すべき重要な問題をはらんでいるといえよう。

ところで、この『仏本行集経』は、既に十二巻本において次のように引用されていたものであった。

『出家功德』

悉達太子、從車匿^{じゆん}、索取摩尼維鉢^{びん}莊嚴七宝把刀、自以右手、執於彼刀、從鞘拔出、即以左手、攬捉紺青優鉢羅色螺髻之髮、右手自持利刀割取、以左手擎、擲置空中。時天帝釈、以希有心、生大歡喜、捧太子髻、不令墮地、以天妙衣、承受接取。爾時諸天、以彼勝上天諸供具、而供養之。

悉達太子、車匿^{じゆん}が辺より、摩尼維鉢^{びん}莊嚴の七宝の把刀を索取し、自ら右の手を以て彼の刀を執り、鞘より抜き出し、即ち左の手を以て、紺青の優鉢羅色の螺髻^{らぎ}の髪を攬捉^{らんせつ}て、右手に自ら利刀を持ちて割取し、左手を以て擎^{ささ}げて空中に擲置^{てきち}せり。時に天帝釈、希有の心を以て大歡喜を生じ、太子の髻^{もとどり}を捧げて地に墮せしめず、天の妙衣を以て承受し接取す。爾の時に諸天、彼の上天に勝れたる諸の供具を以て之を供養せり。(岩波文庫本 八四、八五頁)(卷一八「剃髮染衣品」大正卷三 七三七cより引用)

『發菩提心』

一生補処菩薩、まさに閻浮提にくだらんとするとき、觀史多天の諸天のために、最後の教をほどこすにはく、「菩提心是法明門、不斷三宝故」。(同 一八九頁)(卷六「上托兜率品下」同 六八〇c、六八一cより引用) 『一百八法明門』三八二・三九五・四〇一頁と関連)

『供養諸仏』

(a) 仏本行集経言、仏告目犍連、我念往昔、於無量無辺諸世尊所、種諸善根、乃至求於阿耨多羅三藐三菩提。目犍連、我念往昔、作輪聖王身、值三十億仏、皆同一号、号釈迦。如來及声闍衆、尊重承事、恭敬供養、四事具足。所謂衣服・飲食・臥具・湯藥。時彼諸仏、不与我記、汝当得阿耨多羅三藐三菩提、及世間解・天人師・仏世尊、於未來世、得成正覺。目犍連、我念往昔、作輪聖王身、值八億諸仏、皆同一号、号燃燈。如來及声闍衆、尊重恭敬、四事供養、所謂衣服・飲食・臥具・湯藥・華香。時彼諸仏、不与我記、汝当得阿耨多羅三藐三菩提、及世間解・天人師・仏世尊、目犍連、我念往昔、作輪聖王身、值三億諸仏、皆同一号、号弗沙。如來及声闍衆、四事供養、皆悉具足。時彼諸仏、不与我記、汝当作仏。

『仏本行集経』に言く、仏、目犍連に告げたまわく、我れ往昔を念つに、無量無辺の諸の世尊の所に於て、諸の善根を種え、乃至阿耨多羅三藐三菩提を求めき。目犍連、我れ往昔を念つに、転輪聖王の身と作りて、三十億の仏に値いたてまつりき。皆な同じく一号にして、釈迦と号けき。如來及び声聞衆まで、尊重し承事し、恭敬し供養して四事具足せり。所謂る衣服・飲食・臥具・湯薬なり。時に彼の諸仏、我れに記を与えて、「汝、当に阿耨多羅三藐三菩提を得及び世間解・天人師・仏世尊として、未來世に於て、正覚を成ずることを得べし」としたまわざりき。目犍連、我れ往昔を念うに、転輪聖王の身と作りて、八億の諸仏に値いたてまつりき。皆な同じく一号にして、燃燈と号けき。如來及び声聞衆まで、尊重し恭敬して、四事供養せり。所謂る衣服・飲食・臥具・湯薬・幡蓋・華香なり。時に彼の諸仏、我れに記を与えて、「汝、当に阿耨多羅三藐三菩提を得、及び世間解・天人師・仏世尊たるべし」としたまわざりき。目犍連、我れ往昔を念うに、転輪聖王の身と作りて、三億の諸仏に値いたてまつりき。皆な同じく一号にして、弗沙と号けき。如來及び声聞衆まで、四事供養し、皆な悉く具足せり。時に彼の諸仏、我れに記を与えて、「汝、当に作仏すべし」としたまわざりき。(同 一九七—一九九頁)(卷一「発心供養品」同 六五五より引用)

このように『仏本行集経』は十二巻本において重要な引用典籍となっており、後に指摘する『永平広録』の「八相成道」の問題とも関連してゐるのである。

さて、話題は変わるが、筆者はかねてから『深信因果』の「百丈野狐」の話の典拠はなにか、が気にかかっている。と云つのは、『深信因果』には、次のように「百丈野狐」の典拠が示されていて、一見、何ら問題は無いかに思われる。

この一段の因縁、天聖広燈録てんせいこうとうろくにあり。しかあるに、参学のとまがら、因果の道理をあきらめず、いたづらに撥無因果のあやまりあり。あはれむべし、沸風一扇して、祖道陵替せり。「不落因果」はまさしくこれ撥無因果なり、これによりて悪趣に墮す。「不昧因果」はあきらかにこれ深信因果なり、これによりて聞くもの悪趣を脱す。あやしむべきにあらず、疑ふべきにあらず。近代参禅学道と称ずるともがら、おほく因果を撥無せり。なにによりてか因果を撥無せりと知る。いはゆる「不落」と「不昧」と一等にすることならずとおもへり。これによりて因果を撥無せりと知るなり。

(同 二八七—八頁)

しかし、「百文野狐」の話は、明らかに『宗門統要集』卷三（宋版 二八丁裏）からの引用であり、それにもかかわらず、なぜ、「この一段の因縁、『天聖広燈録』にあり」と記さなければならなかったのであるうか。このことは、今回問題とする『一百八法明門』と密接に関係するのではないかと考えられる。

そもそも、「一百八法明門」の巻は、護明菩薩が、一生補処の菩薩として兜率宮に在りて、人間に下生せんとして諸天の為に最後に説かれたものである。『一百八法明門』は『一百八法明門の總てを忠実に』（一）『仏本行集経』から引用している。その最後は次のように締めくくられている。

護明菩薩とは、釈迦牟尼仏、一生補処として第四天にましますときの名なり。李附馬、天聖広燈録（二）を撰するに、この一百八法門の名字をのせたり。参学のともがら、あきらめしれるはすくなく、しらざるは稻麻竹葦のごとし。いま初心晩学のともがらのためにこれを撰す。師子の座にのぼり、人天の師となれらんともがら、審細参学すべし。この都史多天に一生所繫として住せざれば、さらに諸仏にあらざるなり。行者みだりに我慢することなかれ。一生所繫の菩薩は中有なし。（同 四〇二頁）

ここにも『天聖広燈録』が取り上げられ、しかもこの文には道元の禅籍に対する評価が加わっていると判断される。いま、『天聖広燈録』卷第一「過去七仏章」と「釈迦牟尼仏章」を総て訓読で紹介することにより、道元の釈尊觀の一端を見よう。釈迦牟尼章は次の一七段に分けることとする。

- 〔然燈仏の授記の話〕
- 〔雲孺童の然燈仏供養〕
- 〔一百八法明門の説法↓降兜率〕
- 〔入胎〕
- 〔出胎〕
- 〔出家の決意〕
- 〔四門出遊〕
- 〔出家〕

〔阿羅邏仙人に参学〕

〔優陀羅羅摩子に参学す〕

〔成道〕

〔初転法輪〕

〔説法〕

〔多子塔前の付法〕

〔伝法偈〕

〔伝衣〕

〔涅槃〕

『天聖伝燈録』卷第一。鎮国軍節度使駙馬都尉臣李遵勗編。

〔過去七仏〕

金仙、大法眼蔵を以てするに、之れを教外別行と謂う。故に授記有り。然燈、迦葉に付囑して、賢劫に次第するに、前に六仏有り。『景德伝燈録』の中に先に已に具さに載す。今の編次は、因地より以て伝法の来歴に至る。繼いで釈迦仏より以降なり。

金仙以大法眼蔵、謂之教外別行。故有授記。然燈付囑迦葉、而賢劫次第、前有六仏。景德伝燈録中、先已具載。今之編次、從因地以至伝法来歴。繼自釈迦仏以降。

〔釈迦牟尼仏章〕

〔然燈仏の授記の話〕

天竺釈迦牟尼仏、舍衛城の竹林精舎に在り。阿難曰して言く、「如来往昔幾仏に供養して、菩提を求むるや。復た何仏において最初に諸の善根を植つるや」。仏、阿難に告ぐ。我れ過去無量劫中を念う。閻浮提に一刹利王有りて、降魔冤と名づく。蓮華大城に住して、十善もて世を化す。時に仏の出世する有り、然燈と号す。其の王は仏の功德を聞きて、躬ら迎えて供養す。

天竺釈迦牟尼仏。仏在舍衛城竹林精舍。阿難白言、如来往昔供養幾仏、求於菩提。復於何仏、最初種諸善根。仏告阿難、我念過去無量劫中。閻浮提有一刹利王、名降魔冤。住蓮華大城、十善化世。時有仏出世、号然燈。其王聞仏功德、躬迎供養。

「雲孺童の然燈仏供養」

時に雪山の南に一大姓婆羅門の子の雲童なるもの有り。五百婆羅門の子の上首と為る。年十六にして、珍宝仙人に詣りて、毘陀等の論を受學す。業を卒えて辞し還らんとす。仙曰く、「我が法教中、弟子、學道成ずることを得たり。応に須く厚報すべし」。雲童曰く、「未嘗、何物もて道を訓くに酬ゆるに堪えん」。仙曰く、「當に須く金宝の餅鉢杖蓋革履、悉く金装を用うべし」。雲童答えて曰く、「我れ今未唯だ此の一身なるのみ。仙、若し我に丐求(乞食)を聽さば、即ち來りて奉上せん」。乃ち辞し行く。輪羅波著大城の中に至る。一の婆羅門有り、祭祀徳と名づく。家世に富饒たり。正に般遮于瑟(pañca vārśka maha)〔無遮新なり〕を設く。最後の一日、雲童、会に至る。衆久しく已に名を欽う。歡喜して違ひ迎え、推して上座と爲し、第一供養を受く。雲童、唵囉(dakṣiṇā 施物)を收め已り、持して仙師に奉ぜんとす。行きて蓮華大城に至る。嚴麗して諸天の集会の若き有るを見て、即ち城人に問う、「何の所作をか欲す」。答えて曰く、「汝、聞かすや。然燈如来出世せり。今ま降魔王、仏を請して城に入らしめんとす。故に斯に嚴潔す」。雲童即ち自ら念ず、「我れ今ま応に往きて起居すべし。仙に酬いは未だ晚からず」。又た念す、「仏法は唯だ重んず。法を以て供養するは、最も殊勝と爲す。我れ未だ法を具せず。華を贖いて以て供を奉らんとすべし」。時に王、市の香華を哀めて仏に奉らんとして、私に売るを許さず。雲童、買うことを求めるも、了に得ること能わず。忽ち里巷において一の青衣を見る。名づけて賢者と爲す。密に七茎の優鉢羅華を持ちて、餅内に蔵す。雲童見已りて、歡喜し、乃ち金銭を出して之れを買わんとす。賢者曰く、「王は私に華を贖くことを禁ず」。雲童曰く、「願くは潛かに五枚を輒めよ。誓て相い忘れず」。賢者曰く、「何を將て用いんと欲すや」。雲童曰く、「我れ適たま然燈如来の出世するを聞く。志は妙華を以て以て供養せんと爲す」。賢者曰く、「若し仁者能く我れと未來の因を作して、長く夫婦と爲り、出家得道に及んで、願くは同じく梵行を修して、汝の弟子と作らば、即ち汝に華を与えん」。雲童曰く、「善なり。我れ若し菩薩道を行じ、国城妻子頭目髓腦等を捨てし時、卿、能く障礙を作さざれば、即ち汝の願に随はん」。賢者曰く、「所作に隨喜す。我れ悋惜無し」。即ち金銭を収め、華五枝を付す。

並びに余華を寄せて、同じく仏に奉る。雲童、華を持ち、王に隨いて仏に獻するに、希有の心を生ず。而して願を發して言く、「若し我が身が仏身と變わらざることを得ば、是の華は空中に住まりて、大華蓋に変ぜん」。願を發し已るや纒や、其の華は蓋と成り、虚空中に住まりて、仏の頂上を覆う。是の時、天人各おの上妙宝衣を脱ぎ、地に敷きて供養す。雲童、唯だ著る所の鹿皮有るのみ。亦た以て地に布く。衆人罵辱して、之れを遠処に擲つ。時に雲童、悵然として涕淚す。自ら孤窮なることを念う。仏は其の心を知り、即ち前途を變じて、忽ち泥濘と爲す。衆皆な之れを避く。雲童遽かに泥中に往き、鹿皮の衣を敷き、面を仆して髪を布く。願いて言く、「仏及び人天、皆な当に踐み過すべし。若し如来、我が与に菩提の記を受けざれば、我れ終に起たず」。時に燃燈仏と諸の大衆と、徐るに歩いて来る。先づ其の髪を踐み、次に其の身を履む。大衆を顧みて曰く、「汝等、輒ち摩那婆 (manava 雲童) の身髪を踐むことを得ざれ。唯だ如来のみを除いて踏むべき者無し」。復た雲童に告げて曰く、「汝能く此の広大なる誓願を發し、如来を荷負して、身命を惜します。此れは是れ第二阿僧祇劫の最初の發菩提心の因地なり。今より已後、三業を淨修し、諸波羅蜜門を行じ、心、放逸せず、頭然を救うが如く、三十七品をもてし、八万の聖行を具足し、衆生を憐愍し、正法を護持し、三昧を正受し、法無我を觀じ、甚深の義に入り、決して正覺に趣き、中に退屈すること無かるべし。汝若し能く是の事を弁せば、即ち自ら唱えて言え、我れ能くす」と。時に雲童、仏の教誨を聞きて、悲喜兼ねて盈つ。三たび是の言を唱う、我れ能くす、と。然燈如来始めて告げて曰く、「摩那婆よ。「此に善男子と云ふなり」。却後の無數劫に、當に仏と作ることを得て、釈迦牟尼と号し、十号を具足し、我の如く異なること無し」。既に授記を獲て、身意輕安にして、忽ち虚空に升ること高さ七多羅樹なり。仏に向いて作礼す。仏、雲童に告げて曰く、「汝、東方を觀ば、即ち河沙の諸仏を見る」。雲童の爲に決定の記を授く。是の如く四維上下も皆な然り。雲童は即ち仏足を礼し、願いて出家を求む。然燈は即ち爲に具を授く。十億の諸天は共に一髪を持し、天に歸りて供養す。仏、阿難に告ぐ、「爾の時の雲童とは、即ち我が身是れなり。我れ然燈仏の所より、第二の發菩提心より已來た、常に河沙の諸仏を供養し、菩薩道を行じ、以て成等正覺に至る」。余は『本行經』に説くが如し。

時雪山南有一大姓婆羅門之子雲童。為五百婆羅門子之首。年十六、詣珍宝仙人、受學毘陀等論。卒業辭還。仙曰、我法教中、弟子學道得成。必須厚報。雲童曰、未嘗何物堪酬訓道。仙曰、當須金寶餅鉢杖蓋革履、悉用金裝。雲童答曰、我今唯此一身。仙若聽我丐求、即來奉上。乃辭行。至輪羅波奢大城之中。有一婆羅門、名祭祀德。家世富饒。正

設般遮于瑟（無遮齋也）。最後一日、雲童至會。衆久已欽名。歡喜逢迎、推為上座、受第一供養。雲童收噫嘔已、持奉仙師。行至蓮華大城。見嚴麗有若諸天集會、即問城人。欲何所作。答曰、汝不聞。然燈如來出世。今降冤王請仏入城。故斯嚴麗。雲童即自念、我今応住起居。酬仙未晚。又念、仏法唯重。以法供養、最為殊勝。我未具法。可贖華以奉供。時王哀市香華奉仏、不許私売。雲童求買、了不能得。忽於里巷、見一青衣。名為賢者。密持七茎優鉢羅華、藏於餅內。雲童見已歡喜、乃出金錢買之。賢者曰、王禁私鬻華者。雲童曰、願潛輟五枚。誓不相忘。賢者曰、欲將何用。雲童曰、我適聞然燈如來出世。志買妙華以為供養。賢者曰、若仁者能与我作未來因、長為夫婦。及出家得道、願同修行、為汝弟子者、即与汝華。雲童曰、善。我若行菩薩道、捨國城妻子頭目髓腦等時、卿能不作障礙者、即随汝願。賢者曰、随喜所作。我無吝惜。即收金錢、付華五枝。并寄余華、同奉于仏。雲童持華、随王獻仏、生希有心。而発願言、若我得同仏身不謬者、是華住於空中、变大華葢。纒發願已、其華成葢、住虛空中、覆仏頂上。是時天人各脱上妙宝衣、敷地供養。雲童唯有所著鹿皮。亦以布地。衆人罵辱、擲之遠処。時雲童悵然涕淚。自念孤窮。仏知其心、即变前途、忽為泥薄。衆皆避之。雲童遽往泥中、敷鹿皮衣。仆面布髮。願言、仏及人天、皆当踐過。若如來不与我受菩提記、我終不起。時然燈仏与諸大衆、徐步而來。先踐其髮、次履其身。願大衆曰、汝等不得輒踐摩那婆身髮。唯除如來、無可踏者。復告雲童曰、汝能発此広大誓願、荷負如來、不惜身命。此是第二阿僧祇劫最初発菩提心之因地。自今已後、淨修三業、行諸波羅蜜門、心不放逸、如教頭然、三十七品、具足八万聖行、憐愍衆生、護持正法、三昧正受、觀法無我、入甚深義、決趣正覺、中無退屈。汝若能弁是事、即自唱言、我能。時雲童聞仏教誨、悲喜兼盈。三唱是言、我能。然燈如來始告曰、摩那婆（此云善男子也）。却後無數劫、当得作仏、号釈迦牟尼、具足十号、如我無異。既獲授記、身意輕安、忽升虚空高七多羅樹。向仏作礼。仏告雲童曰、汝觀東方、即見河沙諸仏。為雲童授決定記。如是四維上下皆然。雲童即礼仏足、願求出家。然燈即為授具。十億諸天、共持一髮、帰天供養。仏告阿難、爾時雲童者、即我身是也。我從然燈仏所、第二発菩提心已來、常供養河沙諸仏、行菩薩道、以至成等正覺。余如本行経説。

「一百八法明門の説法↓降兜率」

釈迦⁴²、迦葉仏の所より、正念して兜率陀天に往生し、位、補処に当り、護明菩薩と名づく。知足天を化し、即ち五種の衰相を現す。二十八天、俱に來りて悲感す。護明為に法要を説いて、攀縁を断除す。乃ち金団天子に告げ、生処を選ばし

む。刹利・灌頂・甘蔗・釈種の浄飯王有り。劫初より已来た、輪王断たず。一生菩薩と為るに堪えたり。其の父王と作り。其の家は六十種の功德を具えり。母も亦た三十二勝相を具えり。「即ち天臂城（Devadaha）の釈種にして、善覺女と名づく。摩耶夫人なり。摩耶は此に浄行と云うなり。」護明菩薩は兜率より下生す。諸天勸請す。護明止た曰く、「我れ常に汝等の為に説く。一切有処は、皆な是れ無常なり。芭蕉の堅きが如し。借物の用の如し。会すれば必ず別離す。究竟有ること無し。汝等沈酔して、聞き已りて旋ち忘る。今ま更に汝の為に一百八法門を説く。汝と与に憶念せん。」（法門は經の如し。）

釈迦自迦葉仏所、正念往生兜率陀天、位当補処、名護明菩薩。化知足天、即現五種衰相。二十八天、俱來悲感。護明為説法要、断除攀緣。乃告金剛天子、令選生处。有刹利灌頂甘蔗釈種浄飯王。劫初已來、輪王不断。堪為一生菩薩。作其父王。其家具六十種功德。母亦具三十二勝相（即天臂城釈種、名善覺女。摩耶夫人也。摩耶此云浄行也）。護明菩薩下生兜率。諸天勸請。護明止曰、我常為汝等説。一切有処、皆是無常。如芭蕉堅。如借物用。会必別離。無有究竟。汝等沈酔、聞已旋忘。今更為汝説一百八法門。与汝憶念（法門如經）。

「入胎」

護明は乃ち一心に正念す。天の寿命を捨つることを。時に摩耶夫人は夜初の分において、遂て王に白して曰く、「我れ今夜より請うて八閻齋の戒を受け、五欲の娯樂を去除せん」。王即ち之れを許す。摩耶夫人是の夜に菩薩の六牙の白象に乗り空より來りて、右脅より入りて住まるを夢む。「此土の姫周第五主昭王二十三年癸丑の歲（紀元前一〇二八）の七月十五日の夜に当たれり。」

護明乃一心正念。捨天寿命。時摩耶夫人於夜初分、遂白王曰、我從今夜請受八閻齋戒、去除五欲娯樂。王即許之。摩耶夫人是夜夢菩薩乘六牙白象從空而來、入於右脅而住（当此土姫周第五主昭王二十三年癸丑之歲七月十五日夜矣）。

「出胎」

後に誕るる月に及んで、夫人は園中に遊び、波羅叉樹を攀るに、菩薩は右脅より降生せり。「即ち昭王二十四年甲寅の歲（紀元前一〇二七）の四月八日なり。」周行すること七歩し、目は四方を顧み、手を分ちて天と地とを指して言く、「天上天下に、唯だ我れ独り尊し」。相者曰く、「太子は三十二相を具す。二種の報有り。在家にてあれば転輪聖王と為りて、四

天下を治す。出家すれば阿耨菩提を成じて、三千界を化せん。瑞異を以ての故に、立てて悉達多（此に一切利成と云う。）と名づく。復た阿私陀仙人有り。仏の出世を知りて、天より来りて、王の所に至る。王は太子に命じて之れに見えしむ。仙人拱立して王に謂いて曰く、「我れ及び一切人天は、应当に作礼すべし。菩薩若し返礼すれば、頭は破れて七分せん」。王曰く、「国の相師は、説いて二種の果報有り」と。未だ是非を決定することを知らず。私陀曰く、「彼の人は妄説なり。今ま我れ誠言す。此の子は出家して、正覺道を成じ、人天の師と爲り、妙法輪を転ぜん。願くは王よ、善く聖子を保てば、福祐は疆ること無し」。太子既に生れて七日して、摩耶遂に薨る。王は姨母の摩訶波闍波提を選びて、其をして傳育せしむ。年十九にして、王は毎に太子の捨家するを慮り、爲に三時殿を造らしめ、多方に以て之れを娛ましむ。

後及誕月、夫人游於園中、攀波羅叉樹、菩薩從右脅而降生（即昭王二十四年甲寅歲四月八日）。周行七步、目顧四方、分手指天地言、天上天下、唯我独尊。相者曰、太子具三十二相。有二種報。在家爲轉輪聖王、治四天下。出家成阿耨菩提、化三千界。以瑞異故、立名悉達多（此云一切利成）。復有阿私陀仙人。知仏出世、自天而來、至于王所。王命太子見之。仙人拱立而謂王曰、我及一切人天、应当作礼。菩薩若返礼者、頭破七分。王曰、国之相師、説有二種果報。未知決定是非耶。私陀曰、彼人妄説。今我誠言。此子出家、成正覺道、爲人天師、轉妙法輪。願王善保聖子、福祐無疆。太子既生七日、摩耶遂薨。王選姨母摩訶波闍波提、令其傳育。年十九、王每慮太子捨家、爲造三時殿、多方以娛之。

「出家の決意」

時に淨居天は時已に至れるを知りて、虚空の中において告げて曰く、「昔し菩薩は兜率天に在りし時、大誓願を發し、衆生を度さんと願う。今ま久しく王宮に処す。時已に至れり。世案を貪ること勿れ」。即ち偈を説いて曰く、「世間の事は無常にして、猶如お雲の電を出づるがごとし。尊者よ今ま時至れり。応に捨家して出家すべし」。

時淨居天知時已至。於虚空中告曰、昔菩薩在兜率天時、發大誓願、願度衆生。今久処王宮。時已至矣。勿貪世案。即説偈曰、世間事無常、猶如雲出電。尊者今時至、應捨家出家。

「四門出遊」

太子は深く紛華を厭う。始めて四門の游観有り。次第に生老病死を見て、屢しば父母に咨し、堅く出家を求めんとす。

慈愛の鐘かねの響なごみは、其の欲ねがいに従したがつこと莫なし。太子は是の夜に五夢(39)を感ず。始めは此の大地に席すわるに、須弥を枕とし、四大海水を撮りて手足に置く。次は則ち草一枝有りて、名づけて建立と爲す。臍輪より阿迦膩陀天に至る。復た雑色の四鳥を見るに、各おの方より来りて、足下に至るに、皆な白色に變ず。又た一獸有り、鰲かめ首、白き身にして、太子の足を舐む。最後に一の糞うんちの壤つちを見るに、高峻なること山の如し。上に在りて游行するも、瀆染しせんせられず。

太子深厭紛華。始有四門游觀。次第見生老病死、屢咨父母、堅求出家。慈愛所鐘、莫從其欲。太子是夜感五夢。始席此大地、枕以須弥、撮四大海水、置於手足。次則有草一枝、名爲建立。自臍輪而至阿迦膩陀天。復見雜色四鳥、各從方來。至於足下、皆變白色。又有一獸、鰲首白身、舐太子足。最後見一糞壤、高峻如山。在上游行、不爲瀆染。

「出家」

淨居天子復た来りて告げて曰く、「諸天の八部、虚空に徧滿し、法王を贊助す。宜しく久住せざれ」。是の夜三更に城を踰こえて去る。

淨居天子復來告曰、諸天八部、徧滿虚空、贊助法王。不宜久住。是夜三更踰城而去。

「阿羅邏仙人に参学」

遂かくて迦藍(40)氏大仙の所に至る。仙人問うて曰く、「仁者、発心して何事を欲求すや」。太子曰く、「我れ世間の生老病死を見るに、三界の愛に纏まとわりて、出離すること能わず。我れ成仏して未だ度わたらざるを度さんと要す」。仙曰く、「善き哉。貪愛の者は、是れ世間の大悪蛟龍なり。衆生の心水に居して、一切の善利を失う。仁者、頓に能く感寤すれば、是れ大智人なり。即ち偈を説いて曰く、『一切の法勝は唯だ行にのみ有り。清淨なる寂定は心を過ぎず。恩愛を染著するは最も冤家なり。諸有あやうる恐怖は是れ老死なり』。太子問うて曰く、『諸根は不定なり。云何が調伏する』。仙曰く、『凡そ衆生なる者は、其の二義有り。一は本性、二は變化なり。本性とは、謂く地・水・火・風・空・我及び無相なり。變化とは、謂く諸根の境界、手足語言、動転去來、及び心識なり。若し能く此の二義を分別せば、愛染を生ぜず、名づけて解脱と爲す。又復た衆生は、四種の煩惱を了さとらず、世間に貪著す。一には無信、二には著我、三には有疑、四には無定なり。復た偈を説いて曰く、『山羊の殺さるるは声を作すに因る。飛蛾が灯に投ずるは火の色に由る。水魚の鉤かかに懸るは餌を吞む爲なり。世人の死に趣くは境に牽ひかるるを以てするなり』。復た曰く、『若し能く諸有の相を離るれば、即ち無相を獲るなり。既すで若

に生ぜざれば、即ち非想と名づく。悉達は聞き已りて、黙して之れを識る、「蓋なんて究竟の法にあらざらんや。安いやすんぞ我をして涅槃に至るを得せしめんや」。偈を説いて辞し去る。「本より生老病死の過、并およ及び地火水風空無し。湛然たる三世に師教無し。常淨として自然に解脱を証す。

遂至迦藍氏大仙所。仙人問曰、仁者発心欲求何事。太子曰、我見世間生老病死、三界愛纏、不能出離。我要成仏度於末度。仙曰、善哉。貪愛者、是世間大惡蛟虺。居衆生心水、失一切善利。仁者頓能感寤、是大智人。即説偈曰、一切法勝唯有行、清淨寂定不過心。染著恩愛最冤家、諸有恐怖是老死。太子問曰、諸根不定。云何調伏。仙曰、凡衆生者、有其二義。一者本性、二者變化。本性者、謂地水火風空、我及無相。變化者、謂諸根境界、手足語言、動転去來、及以心識。若能分別此之二義、不生愛染、名為解脫。又復衆生、不了四種煩惱、貪著世間。一者無信、二者著我、三者有疑、四者無定。復説偈曰、山羊被殺因作声、飛蛾投燈由火色。水魚懸鈎為吞餌、世人趣死以境牽。復曰、若能離諸有相、即獲無相。既若不生、即名非想。悉達聞已、默而識之、蓋非究竟之法。安令我得至涅槃。説偈辞去。本無生老病死過、并及地火水風空。湛然三世無師教、常淨自然証解脫。

「優陀羅摩子に參学す」

次に優陀羅(43)の二仙の所に至りて白して言く、「大仙の行する所の法は如何」。大仙言く、「凡およそ相及び非相を取るにおいて、此れは是れ大患大痴なり。若し正意思惟せば、独り微妙の体性有り。寂定殊勝にして、非想非非想処に至る。命寿ほろ還かに永く、仙聖の居する所なり」。悉達は彼の二仙に就いて、五年修学し、究竟にあらざるを知る。

次至優陀羅二仙所白言、大仙所行之法如何。大仙言、凡取於相、及於非相、此是大患大痴。若正意思惟、独有微妙体性。寂定殊勝、至非想非非想処。命寿還永、仙聖所居。悉達就彼二仙、五年修学、知非究竟。

「成道」

即ち雪山に詣り、六年苦行し、等正覚(43)を成す(44)「今大概おほね拳するなり」。

即詣雪山、六年苦行、成等正覚「今大概おほね拳也」。

「初転法輪」『景德伝燈録』。

大梵天王の請を受く。鹿野苑の中に至り、始めて四諦法を以て、五仙人の橋陳如等を度す。

受大梵天王請 至鹿野苑中、始以四諦法、度五仙人橋陳如等。

〔說法二〕(兔・馬・香象)三獸渡河

劣解の者の為には、三界の火難を出さしむるに、四諦法を説き、声聞を証らしむ。兔の河を渡るが如し。乗は羊車と号す。中根の者の為には、生死の根本を觀せしめ、因は無明より起こり、是の如く十二攀緣は、輪迴して息まず。順逆に推究せしめて無明の根を滅せしめ、緣覺の果を証せしむ。馬の河を渡るが如し。乗は鹿車と名づく。大根の者の為には、頓に冥相を開いて直に菩提を示し、即色即空にして、一は則ち一切なり。波羅蜜行を修して、三輪に住せず。薩婆若サハバツツクの城に入る。四擧を虧くこと無く、次つぎに十地に登り、漸に三愚を断ち、等妙円明にして、大菩薩と成る。香象の河を渡るが如し。乗は白牛車なり。

為劣解者、令出三界火難、說四諦法、而証声聞。如兔渡河。乘号羊車。為中根者、令觀生死根本、因起無明、如是十二攀緣、輪迴不息。使順逆推究、滅無明根、証緣覺果。如馬渡河。乘名鹿車。為大根者、頓開冥相、直示菩提、即色即空、一則一切。修波羅蜜行、不住三輪。入薩婆若城。無虧四擧、次登十地、漸断三愚、等妙円明、成大菩薩。如香象渡河。乘白牛車。

〔多子塔前の付法〕

如來は經行して、多子塔(45)の前に至り、摩訶迦葉に命じて、座を分かち坐せしむ。遂て告げて云く、「吾れ微妙の正法眼蔵を以て、汝に密付す。汝当に保護すべし。伝付將來して、断絶せしむること無かれ」。此の大法眼蔵は、爾それより初めと為す。人、一人に囑し、凡聖を扱はず。

如來經行、至多子塔前、命摩訶迦葉、分座令坐。遂告云、吾以微妙正法眼蔵、密付於汝。汝当保護、伝付將來、無令断絶。此大法眼蔵、自爾為初。人囑一人。不扱凡聖。

〔伝法偈〕

爾の時、如來は復た迦葉の為に是の偈(46)を説いて曰く、「法の本より法として無法なり、無法の法も亦た法なり。今ま無法を付す時、法は何ぞ曾て法ならん」。

爾時如來復為迦葉說是偈曰。法本法無法、無法法亦法、今付無法時、法法何曾法。

「伝衣」

又た曰く、「吾れ今ま僧伽梨衣⁽⁴⁷⁾を以て、用て汝に付す。汝当に護持すべし。吾が為に慈氏如来に伝授すべし。」
又曰、吾今以僧伽梨衣、用付於汝。汝当護持。為吾伝授慈氏如来。

「涅槃」

乃ち拘尸那城の娑羅双林に往きて、示して涅槃に入る。「娑羅樹は、四双に行列す。仏將に円寂せんとするに、俄かに合して二と爲る。因みに双樹と名づく。色は白きこと練⁽⁴⁸⁾の如し。故に鶴樹と名づく。」復た純陀に告げて曰く、「諸仏の境界は、皆な悉く無常なり。諸性の性相も、亦復た是の如し。如来は既に種種の法要を以て、菩薩・緣覺・声聞に示教し、諸の天・仙・外道を化す。最後に須跋陀羅⁽⁴⁹⁾を度す。教を後代に遺す。即ち広く神変を現じ已りて、右脅に足を累ねて、首を北にして臥し、大寂滅定に入る。応に還源を尽すべし。是の時、大迦葉は外に在り。最後にして至る。仏は金棺の中より、双足を出現す。迦葉は作礼し已る。人天衆は栴檀の薪を奉ずるも、終に然くこと能わす。迦葉は乃ち如来に請うに三昧火は自ら之れを闡維す。即時に金棺は七宝牀より升起り、俱尸那城を過ること七巾す。本処に却還り、火光三昧を化して自ら之れを焚く。阿泥盧豆⁽⁵⁰⁾等、舍利を収めること八斛四斗なり。貯うるに金壺を以てす。阿闍世王は八国の諸王と共に、各おの兵護を蔽かにし、散分して塔を起つに、人天は供養す。

『天聖広燈録』卷第一。

乃往拘尸那城娑羅双林、示入涅槃（娑羅樹、行列四双。仏將円寂、俄合為二。因名双樹。色白如練。故名鶴樹）。復告純陀曰、諸仏境界、皆悉無常。諸行性相、亦復如是。如来既以種種法要、示教菩薩緣覺声聞、化諸天仙外道。最後度須跋陀羅。遺教後代。即広現神变已、右脅累足、北首而臥、入大寂滅定。応尽還源。是時大迦葉在外。最後而至。仏従金棺中、出現双足。迦葉作礼已。人天衆奉栴檀薪、終不能然。迦葉乃請如来三昧火自闡維之。即時金棺従七宝牀升起、遍俱尸那城七巾。却還本処、化火光三昧而自焚之。阿泥盧豆等、收舍利八斛四斗。貯以金壺。阿闍世王与八国諸王、各蔽兵護、散分起塔、人天供養。

天聖広燈録卷第一。

ここには「成道」以降には、禅宗で創作された仏伝もあるが、『天聖広燈録』の特色はそれ以前の『仏本行集経』を基本

にした点にある。

ここまで見てくると、次の『四禅比丘』における雷庵正受の『嘉泰普燈錄序』の批判は、明らかに『供養諸仏』の「あるいは五茎の青蓮華を、五百の金錢をもて買取て、燃燈仏を供養したてまつりまします。あるいは鹿皮衣、これを供養したてまつる」(同 二二五頁)に顯著に見られるように、『仏本行集経』による仏伝が基本に考えられていたのである。この雲童子の話は、『供養諸仏』考¹⁾で長文を引用してその経に基づくことを検討しておいた。このことによつて、儒教や道教との明らかな相違があり、道元の仏伝に教禅一致批判、三教一致批判そして教外別伝批判があることを十二巻本『正法眼蔵』は基本に持っていたのである。『天聖広燈録』が『仏本行集経』で構成されている禅籍であるのに対して、『嘉泰普燈録』にはその基本がなかったと考えられていたと言つてよいであらう。

大宋嘉泰中、有僧正受。撰進普燈錄三十卷云、臣聞孤山智円之言曰、吾道如鼎也、三教如足也。足一虧而鼎覆焉。臣嘗慕其人稽其說。乃知、儒之為教、其要在誠意。道之為教、其要在虚心。釈之為教、其要在見性。誠意也虚心也見性也、異名体同。究厥攸帰、無適而不与此道会云云。

大宋嘉泰中に僧正受というもの有り。普燈録三十巻を撰進するに云く、臣、孤山智円の言を聞くに曰く、吾が道は鼎の如し、三教は足の如し。足一も虧れば鼎覆えりと。臣、嘗て其の人を慕い其の説を稽つ。乃ち知りぬ、儒の教たること、其の要は誠意に在り、道の教たること、其の要は虚心に在り、釈の教たること、其の要は見性に在ること。誠意と虚心と見性と、名を異にして体同じ。厥の帰する攸を究むるに、適として此の道と会せずといふこと無し、云々

かくのごとく僻計生見のともがらのみ多し、ただ智円・正受のみにはあらず。このともがらは、四禅を得て四果と思はんよりも、その誤りふかし。謗仏・謗法・謗僧なるべし。すでに撥無解脱なり、撥無三世なり、撥無因果なり。莽莽蕩蕩招殃禍、疑ひなし。三宝・四諦・四沙門なしとおもふしもがらにひとし。

(岩波文庫本 三五三丁五頁)

前述のように、『天聖広燈録』と『仏本行集経』との関係が、総て道元の仏伝として一致するかというところではない。道元と『仏本行集経』の関係は、『永平広録』巻七 四九五上堂が注目される。この上堂は、道元の五三歳の時に當たる。

浴仏上堂。八相成道(降兜率・入胎・出胎・出家・降魔・成道・轉法輪・入涅槃)は、諸仏の化儀なり。是を以て摩耶、毘尼園に詣到り、菩薩、降生して世間に現す。帝釈、衣を承けて菩薩を擎げ、人天、始めて独尊の顔を拝す。正当恻摩の時、宝蓮、華開いて以て菩薩の足を承け、諸天、華雨ふらして以て菩薩の上に散す。即ち四方面に行くこと各おの七歩、四方を親視して目、未だ曾て瞬がず。口、自ずから言を出だしていつ、「世間の中、我れ最勝為り。世間の中、我れ最尊為り。我れ今日より生分已に尽き、是れ最後身なり、我れ当に作仏すべし」。地より二池涌いて聖母に供養し、空より二水下りて菩薩を滲す。環瑠宝衣充滿し、金牀宝傘円備す。蓋し是れ諸天の供養する所なり、宛も是れ機縁の純熟する所なり。天女二万、摩耶を困遶して扶持す。諸天五百、菩薩を讚歎して祇候す。三千大千の草木、忽ち好華を生ず。一切所有の衆生、悉く光明を被る。受苦の類、皆な苦を脱れ、快樂の輩、更に樂を増す。吉祥の瑞相、誰か敢て説き尽さん。慶幸の利益、今日猶お新たなり。甚が為にか斯の如きか。大衆遷た道箇の道理を委悉せんと要すや。良久して云く、衲僧の乾屎橛を坐断し、功夫弁道、草鞋穿けり。無明の殻、豈に肩を等しくせんや、此の刹那より大千に王たり。

浴仏上堂。八相成道者諸仏化儀也。是以摩耶詣到毘尼園、菩薩降生現世間。帝釈承衣擎菩薩、人天始拜独尊顔。正当恻摩時、宝蓮華開以承菩薩足、諸天華雨以散菩薩上。即行四方面各七歩、親視四方目未曾瞬。口自出言、世間之中我為最勝。世間之中我為最尊。我從今日生分已尽、是最後身、我当作仏。地涌二池而供養聖母、空下二水而滲菩薩。環瑠宝衣充滿、金牀宝傘円備。蓋是諸天之所供養也、宛是機縁之所純熟也。天女二万、困遶於摩耶而扶持。諸天五百、讚歎於菩薩而祇候。三千大千之草木、忽生好華。一切所有之衆生、悉被光明。受苦之類皆脱苦、快樂之輩更増樂。吉祥之瑞相、誰敢説尽。慶幸之利益、今日猶新。為甚如斯。大衆遷要委悉道箇道理。良久云、坐断衲僧乾屎橛、功夫弁道草鞋穿。無明殼豈等肩、從此刹那王大千。(春秋社四 七八〜八〇頁)

この出典として鏡島元隆訳注『永平広録3』(二三四頁、春秋社、二〇〇〇年二月)は、「以下、『法苑珠林』九の取意文か」となっているが、相当する次の『仏本行集経』から見て、出典は『仏本行集経』にほぼ間違いないであろう。

菩薩生已、無人扶持、即行四方、面各七歩、歩歩拳足、出大蓮華。行七歩已、親視四方、目未曾瞬、口自出言。先觀東方、不如彼小嬰孩之言、依自句偈、正語正言、世間之中、我為最勝。我從今日、生分已尽。此是菩薩希奇之事。未

曾有法、余方悉然。……菩薩生已、諸眷屬等、求覓於水、東西南北、皆悉馳走、終不能得。即於彼園菩薩母前、忽然自湧出二池水、一冷一煖。菩薩母取此二池水、隨意而用。又虛空中、二水注下、一冷一煖。取此水洗浴菩薩身。此是菩薩希奇之事。未曾有法。

菩薩生れ已りて、人の扶持する無し、即ち行くこと四方にして、面ごとに各おの七歩し、歩歩足を挙ぐるに、大蓮華を出す。行こと七歩し已りて、四方を觀視し、目未だ曾て瞬がず、口自らに言を出だす。先ず東方を觀て、彼の小學孩の言の如くならず、自らの句偈に依りて、正語正言すらく、「世間の中、我れ最勝爲り。我れ今日より、生分已に尽く。此は是れ菩薩希奇の事。未曾有の法なり、余方も悉く然り。……菩薩生れ已りて、諸の眷屬等、水を求覓めて、東西南北に、皆な悉く馳走す、終に得ること能はず。即ち彼の園の菩薩の母の前に於て、忽然として自ら二池の水を湧出す、一は冷かに、一は煖かなり。菩薩の母は此の二池の水を取りて、随意に用ゆ。又た虛空の中より、二水注下す、一は冷かに、一は煖かなり。此の水を取りて菩薩の身を洗浴す。此は是れ菩薩の希奇の事なり。未曾有の法なり。

(大正卷三 六八七b)

『仏本行集經』には「出胎」の「天上天下、唯我獨尊」の語はないが、道元の著述の中でも、『永平広録』卷一 三七上堂(四三歳)・卷三 二四〇上堂(四八歳)、「行持上」古鏡「溪声山色」説心説性「七十五卷本」發菩提心には「天上天下、唯我獨尊」とあるから、『雲門広録』卷中(大正卷四七 五六〇b)などの禪籍から引用されたことはある。しかし、道元の五三歳の時に『仏本行集經』が注目されていたことも確かであり、禪籍としてその經を重んじた「天聖広燈録」があったことも見逃すことはできないであらう。

このことは、ひとり「出胎」に限らないことが注目される。『永平広録』卷五の三六〇・四〇六と卷七の四七五の三つの「仏成道会」の上堂は、道元五〇・五一・五二歳の時のものであるが、なぜか『仏本行集經』に基づくのである。

三六〇 臘八上堂。行法の二輪親しく転ずる處、菩提樹下に覺華明らかなり。無量無數の大千界、依正一時に快樂生ず。我が本師釈迦牟尼仏大和尚世尊、今朝、菩提樹下の金剛座上に在りて坐禅し、等正覺を成じたまふ。最初に説いて曰く、「是の夜の四分、三已に過ぐ。余後の一分に明、將に現ぜん」とす。衆類の行と不と、皆な未だ動ぜず。是の時、大聖無上尊、衆苦を滅し已りて菩提を得たり。即ち世間一切智と名づく。世尊怎麼に道う、意、作麼生。大衆遷た委

悉せんと要すや。良久して云く、雪裏の玉梅只だ一枝。妙香鼻を撲つて春に先んじて到る。當時、世尊、復た言く、「往昔造作せる功德の利もて、心に念ずる所の事皆な成ずるを得。速疾に彼の禪定の心を証し、又復た涅槃の岸に到る。所有る一切諸の怨敵、欲界自在の魔波旬、我れを悩ますこと能わずして悉く帰依す。福德、智慧の力有るを以てなり。若し能く勇猛に精進を作して、聖智を求めば得ること難からず。既に得れば即ち諸の苦辺を尽くし、一切の衆罪皆な銷滅す」。是れ則ち世尊の菩提を成ぜし時、最初に人天の爲にする説法なり。法子・法孫、知らざるべからず。既に知り了ることを得たらば、作麼生か道わん。永平今朝、雲水の爲に道わん、聽かんと要するや。良久して云く、明星正に現じて仏、成道す。雪裏の梅華只だ一枝。大地有情、草木と同じく、未曾有の樂しみ斯の時に得たり。

臘八上堂。行法二輪親転処、菩提樹下覺華明。無量無數大千界、依正一時快樂生。我本師釈迦牟尼仏大和尚世尊、今朝在菩提樹下金剛座上坐禪、成等正覺。最初説曰、是夜四分三已過。余後一分明將現。衆類行不皆未動。是時大聖無上尊、衆苦滅已得菩提。即名世間一切智。世尊恁麼道、意作麼生。大衆還要委悉麼。良久云、雪裏玉梅只一枝。妙香撲鼻先春到。當時世尊復言、往昔造作功德利、心所念事皆得成、速疾証彼禪定心、又復到於涅槃岸。所有一切諸怨敵、欲界自在魔波旬、不能惱我悉歸依。以有福德智慧力。若能勇猛作精進、求聖智者得不難。既得即盡諸苦辺、一切衆罪皆銷滅。是則世尊成菩提時、最初爲人天説法也。法子・法孫不可不知。既得知了、作麼生道。永平今朝為雲水道、要聽麼。良久云、明星正現仏成道、雪裏梅華只一枝。大地有情同草木、未曾有樂得斯時。（春秋社版卷三 一三〇—二頁）

四〇六 臘八上堂。日本国の先代、曾て仏生会・仏涅槃会を伝う。然れども未だ曾て仏成道会を伝え行ぜず。永平始めて伝えて已に二十年なり。今より已後、尽未來際伝えて行ぜん。如來成道し最初に説く。是の夜、四分より乃至一切智まで、師、前の如く擧し了りて乃ち云く、當に恁麼の時、永平門下、且く如何が道わん。梅華、雪裏に一枝開く。春風の次第に吹くことを仮らず。往昔の造作より乃至悉く消滅すまで、師又た擧し了りて云く、大衆、道箇の道理を委悉せんと要すや。良久して云く、十方世界、光明を蒙り、一切衆生、仏説を聞く。拄杖と袈裟と、共に笑忻し、僧堂、仏殿、鉢盂悦ぶ。

臘八上堂。日本国先代曾て仏生会・仏涅槃会。然而未曾伝行仏成道会。永平始伝已二十年矣。自今已後、尽未來際伝

而行矣。如来成道最初説。是夜、四分乃至一切智、師如前拏了乃云、当怎麽時、永平門下、且道如何。梅華雪裏一枝開、不仮春風次第吹。往昔造作乃至悉消滅、師又拏了云、大衆要委悉這箇道理麼。良久云、十方世界蒙光明、一切衆生聞仏説。拄杖袈裟共笑忻、僧堂仏殿鉢盂悅。(同 二七四頁)

四七五 臘八上堂。世尊成道して最初に説きたもう、是の夜、四分より乃至一切智まで、師前の如く拏了りて著語して云く、無量の功德今ま已に現す。躑跳す手中臘月の扇。往昔の造作より乃至皆な除滅すまで、師、前の如く拏了りて乃ち云く、永平拝して成道の成を統がん。修証は無きにあらず、覺道成す。何の階級か有らん、曉天明らかなり。是の時、我等が大慈父、悦ぶべし眉毛、一茎を添つ。

臘八上堂。世尊成道最初説、是夜四分、乃至一切智、師如前拏了著語云、無量功德今已現、躑跳手中臘月扇。往昔造作、乃至皆除滅、師如前拏了乃云、永平拝続成道之成。修証不無覺道成、有何階級曉天明。是時我等大慈父、可悦眉毛添一茎。(同卷四 五八頁)

道元によつて日本で「仏成道会」が始められたことも注目されるが、更にこれらの三つの上堂は總て『仏本行集経』卷三〇の次の語を三年間に亘つて繰り返されたことも注目されよう。

其夜三分已過、第四於夜後分。明星將欲初出現時、夜尚寂靜。一切衆生行与不行、皆未覺寤。是時婆伽婆、即生智見。成阿耨多羅三藐三菩提。而有偈説。

是夜四分三已過、余後一分明將現。

衆類行不皆未動、是時大聖無上尊。

衆苦滅已得菩提、即名世間一切智。

其の夜の三分、已に過ぐ、第四の夜後分に於て、明星將に初めて出現せんと欲する時、夜尚お寂靜なり。一切の衆生の行と不行と、皆な未だ覺寤せず。是の時、婆伽婆、即ち智見を生じて、阿耨多羅三藐三菩提を成じたまう。而して偈有りて説く。

是の夜の四分、三已に過ぐ、余後の一分に明、將に現せんとす。

衆類の行と不と、皆な未だ動せず、是の時、大聖無上尊、

衆苦を滅し已りて菩提を得たり、即ち世間一切智と名づく。

(大正卷三 七九五c)

爾時世尊、既成阿耨多羅三藐三菩提已、即作如是師子音吼、而説偈言。

往昔造作功德利、心所念事皆得成。

速疾証彼禪定心、又復到於涅槃岸。

所有一切諸怨敵、欲界自在魔波旬。

不能惱我悉歸依、以有福德智慧力。

若能勇猛作精進、求聖智者得不難。

既得即尽諸苦辺、一切衆罪皆除滅。

爾の時、世尊、既に阿耨多羅三藐三菩提を成じ已りて、即ち是の如く師子音吼して、而して偈を説きて言く。

往昔造作せる功德の利もて、心に念ずる所の事、皆な成ずることを得たり。

速疾に彼の禪定の心を証し、又復た涅槃の岸に到る。

所有る一切諸の怨敵、欲界自在の魔波旬、

我れを悩ますこと能わずして悉く歸依す、福德、智慧の力有るを以て、

若し能く勇猛に精進を作して、聖智を求めば得ること難からず。

既に得れば即ち諸苦の辺を尽くし、一切の衆罪、皆な除滅す。

(同 七九六a b)

七十五卷本『發菩提心』(岩波文庫本)(三) 三三一頁)や『永平広録』卷一 三七上堂(四二歳)、卷三 一四〇上堂

(四八歳)には、『釈迦牟尼仏言、明星出現時、我と大地有情同時成道』とあるが、この説は晩年には見られないのであり、

しかも、一四〇上堂は四節上堂の一つとしては記録されてはいないと思われる。石島尚雄氏が『大地有情同時成道』再考』

(『曹洞宗研究員紀要』第一二号、一九九八年一〇月)で、それらは『建中靖国統燈録』卷三開先善蓮章の「老胡也祇道、

明星出現時、我と大地有情同時成道』(統蔵卷二二六 三六右下)を出典とする説を最近提示したが、『仏本行集経』に基

ついで説示された十二卷本の『一百八法門』の性格は、『永平広録』においても道元の晩年に共通するものであることだけは明確であると断定できるであらう。それは道元の晩年の『仏伝観』を示唆する重要な視点と捉えてよいと思われる。

註

(1) 一百八法門説は『一百八法門』の場合、後に問題とするように、明らかに『仏本行集経』卷六(大正卷三 六八〇b)・六八二b)に基づくものである。ここに『一百八法門』を説く經典として、地婆訶羅訳『方广大莊嚴経』卷一「法門品」をその理解を助ける為に百八の番号を付して参考に掲げておきたい。この経については、国訳一切経の本縁部九に常盤大定氏の訳が存する。なお、『仏本行集経』と特に異なる箇所は以下にゴチックとしておきたい。

菩薩告言、汝等諦聽。如諸菩薩各為大衆、説將没相諸法門、安慰天人。我今亦當為汝等説諸法門、有一百八。何等名為百八法門。①信是法門、意樂不斷故。②淨心是法門、除乱濁故。③喜是法門、安隱心故。④愛樂是法門、心清淨故。⑤身戒是法門、除三惡故。⑥語戒是法門、離四過故。⑦意戒是法門、斷三毒故。⑧念仏是法門、見仏清淨故。⑨念法是法門、説法清淨故。⑩念僧是法門、証獲聖道故。⑪念捨是法門、棄一切事故。⑫念戒是法門、諸願滿足故。⑬念天是法門、起仏大心故。⑭慈是法門、超映一切諸福事業故。⑮悲是法門、増上不善故。⑯喜是法門、離一切憂惱故。⑰捨是法門、自離五欲及教他離故。⑱無常是法門、息諸貪愛故。⑲苦是法門、願求永斷故。⑳無我是法門、不著我故。㉑寂滅是法門、不令貪愛增長故。㉒慚是法門、内清淨故。㉓愧是法門、外清淨故。㉔諦是法門、不誑人天故。㉕實是法門、不自欺誑故。㉖法行是法門、依於法故。㉗三帰是法門、超三惡趣故。㉘知所作是法門、已立善根不令失壞故。㉙解所作是法門、不因他悟故。㉚自知是法門、不自矜高故。㉛知衆生是法門、不輕毀他故。㉜知法是法門、隨法修行故。㉝知時は法門、無痴暗見故。㉞破壞憍慢是法門、智慧滿足故。㉟無障礙心是法門、防護自他故。㊱不恨是法門、由不悔故。㊲勝解是法門、無疑滯故。㊳不淨觀是法門、斷諸欲覺故。㊴不瞋是法門、斷惡覺故。㊵無痴是法門、破壞無智故。㊶求法是法門、依止於義故。㊷樂法是法門、証契明法故。㊸多聞是法門、如理觀察故。㊹方便是法門、正勤修行故。㊺遍知名色是法門、超過一切和合愛著故。㊻拔除因見是法門、証得解脫故。㊼斷貪瞋是法門、不著痴垢故。㊽妙巧是法門、遍知苦故。㊾界性平等是法門、由永斷集故。㊿不取是法門、勤修正道故。①無生忍是法門、於滅作証故。②身念住是法門、分析觀身心輕利故。③受念住是法門、離一切受故。④心念住是法門、智出障翳故。⑤四正勤是法門、斷一切惡修一切善故。⑥四神足是法門、身心輕利故。⑦信是法門、非邪所引故。⑧精進是法門、善思察故。⑨念根是法門、善業所作故。⑩定根是法門、由心解脫故。⑪慧根是法門、智現前証故。⑫信力是法門、能遍超魔力故。⑬精進力是法門、不退転故。⑭念力是法門、不遺忘故。⑮定力是法門、斷一切覺故。⑯慧力是法門、無能損壞故。⑰念覺分是法門、如実住法故。⑱摂法覺分是法門、円満一切法故。⑲精進覺分是法門、智決定故。⑳喜覺分是法門、三昧安樂故。㉑輕安覺分是法門、所作成并故。㉒定覺分是法門、平等覺悟一切法故。㉓捨覺分是法

- 門、厭離一切受故。⑦正見是法門、超証聖道故。⑦正思惟是法門、永斷一切分別故。⑦正語是法門、一切文字平等覺悟故。⑦正業是法門、無業果報故。⑦正命是法門、離一切希求故。⑦正精進是法門、專趣彼岸故。⑧正念是法門、無念無作無意故。⑧正定是法門、証得三昧不傾動故。⑧菩提心是法門、紹三宝種使不斷故。⑧大意樂是法門、不求下乘故。⑧增上意樂是法門、緣無上广大法故。⑧方便正行是法門、圓滿一切善根故。⑧檀波羅蜜是法門、成就相好淨仏国土。教化衆生除慳慳故。⑧尸波羅蜜是法門、超過一切惡道難處、教化衆生守禁戒故。⑧屬提波羅蜜是法門、永離憍慢瞋恚等一切煩惱。教化衆生斷諸結故。⑧毘離耶波羅蜜是法門、成就引発一切善法、教化衆生除憍憍故。⑧禪波羅蜜是法門、出生一切禪定神通、教化乱意衆生故。⑧般若波羅蜜是法門、永斷無明有所得見、教化愚痴暗蔽惡慧衆生故。⑧方便善巧是法門、隨諸衆生種種意解、現諸威儀及示一切仏法安立故。⑧四摂事は法門、摂諸群生令求趣証大菩提法故。⑧成熟衆生是法門、不著己業利他無倦故。⑧受持正法是法門、斷一切衆生雜染故。⑧福德資糧是法門、饒益一切衆生故。⑧智慧資糧是法門、圓滿十力故。⑧奢摩他資糧是法門、証得如來三昧故。⑧毘鉢舍那資糧是法門、獲得慧眼故。⑧無礙解是法門、獲得法眼故。⑧決択是法門、仏眼清淨故。⑧陀羅尼是法門、能持一切仏法故。⑧弁才是法門、巧説言詞令一切衆生歡喜滿足故。⑧順法忍是法門、隨順一切仏法故。⑧無生法忍是法門、得授記萌故。⑧不退転地是法門、圓滿一切仏法故。⑧諸地増進是法門、受一切智位故。⑧灌頂是法門、從兜率天下生、入胎初生出家苦行、詣菩提場降魔成仏、転正法輪起大神通、從切利天下現入涅槃故。是故菩薩將下生時、於天衆中説如斯法。諸比丘、菩薩説是諸法明門之時、於彼會中八万四千天子、阿耨多羅三藐三菩提心。三万二千年子、得無生法忍。三万六千那由他天子、於諸法中遠塵離垢得法眼淨。兜率諸天、皆散妙花、積至于隣。(大正卷三 五四四a 五四五b)
- (2) 兜率陀 觀史多天。(梵) Tusita。欲界の六欲天(四大王衆天・三十三天・夜摩天・觀史多天・衆變化天・他化自在天)の二つ。前の二天は地居天、後の四天は空居天。六欲天の上は色界の初禪。
- (3) 由旬 (梵) yojana。距離の単位。
- (4) 菩薩……『發菩提心』一八九頁参照。
- (5) 正信 八四も「正信」であり、『方廣大莊嚴經』は「信」とし、八四は「増上意樂」とする。
- (6) 身行 以下、身口意の三業が説かれる。
- (7) 三業 身口意であるが、『方廣大莊嚴經』は「三悪」に作る。
- (8) 念仏 以下、念天まで、六念「六不退法」が説かれる。六念については、『長阿含經』卷二(大正卷一 一一二a)参照。
- (9) 慈 慈・悲・喜・捨の四無量心が説かれる。
- (10) 無常觀 以下、寂定觀まで四法本末『増一阿含經』卷二八(大正卷二 六四〇b 四憂檀那『菩薩地持經』卷八(大正卷三〇 九三四c)が説かれる。『大乘義章』卷二七参照。

- (11) 法行 『仏本行集經』卷一五「言法行者、此是善行、乃至善能不言衆生」(同 七二四 a b)となる。
- (12) 三歸 八二の法明門も参照。
- (13) 受念 以下は『三十七品菩提分法』の四念処・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺支・八正道を参照すべきであるが、ここには道元独自の解釈はないし、比較検討するのは複雑になるので、別に問題としたい。なお、四念処の身念処が落ちており、大正藏經本にはあり、加えると一〇九法門となる。ここも当然補って解すべきであろう。
- 身念処は法明門、諸法寂靜故。
- 「訳」身念処(身を不淨と觀察すること)は法明門である、それはあらゆる存在はまよいを離れて苦が無いから。
- (14) 信根 以下、慧根まで、五根が説かれる。
- (15) 信力 以下、慧力まで、五力が説かれる。
- (16) 念覺分 以下、捨覺分まで、七覺分¹¹七等覺支が説かれる。
- (17) 正見 以下、正定まで、八正道支が説かれる。
- (18) 菩提心 『發菩提心』(同 一八九頁)に取り上げられる。後文にも指摘する。
- (19) 依倚 以下、三項は『方廣大莊嚴經』とは表現が異なる。
- (20) 檀度 以下、智度まで、六度¹²六波羅蜜が説かれる。
- (21) 四摂法 『仏本行集經』卷三には「有四种摂而摂衆生。何等為四。一者布施、二者愛語、三者利益、四者同時」(同 六六三 b)とある。『菩提薩埵四摂法』(四 四一九頁以下)の項目を抜粋すると、「その布施といふは、不貪なり。不貪といふは、むさぼらざるなり。むさぼらずといふは、よのなかにいふへつらはざるなり。(中略)愛語といふは、衆生をみるにまじ慈愛の心をおこし、願愛の言語をほととすなり。おほよそ暴悪の言語なきなり。(中略)利行といふは、貴賤の衆生におきて、利益の善巧をめぐらすなり。(中略)同事といふは、不違なり。自にも不違なり、他にも不違なり」とある。
- (22) 十力 『俱舍論』卷二七(大正卷二九 一四〇 b)によつた。
- (23) 一生所繫の菩薩 『發菩提心』(同 一八九頁)に既出したことは指摘した。
- (24) 天聖広燈錄 『天聖広燈錄』については、後述する。
- (25) 筆者…… 以下については、石井修道『「百八法明門」をめぐって』、『日本印度学仏教学研究』第五〇巻第一号、二〇〇一年二月)でも既に取り上げた。
- (26) 釈迦牟尼仏 以下の生没年は近代研究の成果とは異なるものである。代表的な中村元説では、紀元前四六三丁三八三年とされている。

- (27) 仏 『仏本行集経』卷三(大正三 六六四a)
- (28) 雲童 同 六六五a以下。
- (29) 賢者 同 六六六c以下。
- (30) 鹿衣 同 六六七b以下。
- (31) 然燈仏 同 六六七c以下。
- (32) 釈迦 同 六七六b以下。
- (33) 護明 同 六八二b以下。『祖堂集』(一八)も参照。
- (34) 姫周 …… 中国の曆に換算した説は、『周書異記』(『唐護法沙門法琳別伝』に引用。大正巻五〇二二〇七a)による。
- (35) 誕る …… 同 六五八b以下。『祖堂集』(一八)参照。『仏本行集経』は「天上天下、唯我独尊」の語ナシ。『雲門広録』
卷中(大正巻四七 五六〇b)などによる。
- (36) 摩耶 …… 同 七〇一a以下。
- (37) 時に淨居天 …… 同 七一六b以下。
- (38) 太子は深く …… 同 七一九c以下。
- (39) 五夢 …… 同 七二八a b以下。
- (40) 淨居天子 …… 同 七二八b以下。『出家功德』八四頁参照。
- (41) 迦藍 …… 同 七五二c以下。
- (42) 優陀羅 …… 同 七五七b以下。
- (43) 等正覚を成ず 釈迦牟尼仏言、明星出現時、我与大地有情同時成道。(七十五巻本『発菩提心』三三三二頁。広録巻一・三)は、『建中靖国統燈録』卷三開先善蓮章「老胡也祇道、明星出現時、我与大地有情同時成道」(統蔵巻一三六 三六右下)を初出とする。
- (44) 劣解の者 …… 『優婆塞戒経』卷一(大正巻二四 一〇三八b)を含め、『都序』卷下一(大正巻四八 四〇八c)、『涅槃経』卷三三・二七、『法華経』卷一「序品」(大正巻九 三三c)参照。
- (45) 多子塔 …… 『涅槃経』卷二(大正巻二二 六一七b c)参照。『天聖広燈録』卷二の摩訶迦葉章は「拈華微笑」の話の初出であり、「如来在雪山說法、諸天獻華。世尊持華示衆。迦葉微笑。世尊告衆曰、吾有正法眼蔵、涅槃妙心、付囑摩訶迦葉。流布将来、勿令断絶。仍以金縷伽梨衣付迦葉、以俟慈氏」(統蔵巻一三五 三〇六左上)とあつて、多子塔前の付法との関係が問題となる。そのことは既に「拈華微笑」の話の成立をめくつて(平井俊榮博士古稀記念論文集『三論教学と仏教諸思想』所収、春秋社、

二〇〇〇年一〇月)等の論文で論じた。

- (46) 偈……『景德伝燈録』卷一による。『仏本行集経』にナシ。
- (47) 僧伽梨衣……『景德伝燈録』卷一による。『仏本行集経』にナシ。
- (48) 拘尸那城……『景德伝燈録』卷一による。『仏本行集経』にナシ。